

352
452

0^m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10¹⁶
11³⁰
1
2
3
4
5

始



特220
673

第二版



俗通靈質交合性原理

屑屋極道著



序

一、この靈質交合性原理は、世界の學界及び社會への爆彈たるの時期必らず到來すべし。何んとならば、コペルニクス、の地動説にさへ甚しく驚駭させられし世界が、今やこの原理によりて、

(イ) 太陽は灼熱球にあらずして、地球の如く、地殻や大氣が存在し、従つて生物の棲息も可能なるべきこと。

(ロ) 人の精神 \parallel 靈魂の正體は、精絲や卵子中の H \parallel 靈子、食物たる動植物中の H \parallel 靈子 \parallel エーテル原子、肺より吸入の H \parallel 窒素、飲料水中の H \parallel 水素、等の集合或は結合したるものなること（無有哲學參照）。

等々を證明可能なると同時に、その他現代學、醫學、哲學、などの高等理論の殆んど全部を根底より覆へさせられんとするに於てをや。

一、眞の眞理を心から欲求して探究せんとする人、學者として其職や業に忠實或は眞摯なる人、豫言や奇蹟を絶対に信ぜざる人、眞の日本及び日本精神を知らんとする人、等は本書必讀の要あるべし。

一、現代科學の光輝ある雙璧は、相對性原理と電子論ならん。それらを信捧する學者を首めとして、この原理を承服する能はずして異議を有せらるゝ人士等に對して、何時でも悦んで論争の矢表に立つことを辭せざるを以て、茲に言明すると共に、斯かる學者は反駁論文掲載雜誌名など必らず御通知あらんことを希望する次第なり。

一、編輯後尙意に満たざる點多々あるも、非常時日本の士氣を鼓舞する一助ともならんか、等の爲に急ぐを以て此まゝ刊行すると雖、我畢生の業として、今少し完全たらしめんことを期するものなり。

一、第一回の贈呈は百五十部にして、それにて我國學界の主たる代表機關を略ぼ網羅し得たるやに思ふ（然し尙研究中なり）。

萬一、これにてさへ、多少の輿論をさへ喚起し得ざる場合ありとも、かゝる幼稚なる學界や學者に對して、我れまた何をか云はんや、我れは唯彼等の無智、頑迷、固陋などに對して惻隱の情を禁じ得ざるにすぎざるのみなればなり。

然し、かゝる不祥事は、眞理、學界、皇國、を首め我國學界や學者の名譽、などの爲めにも信ずべきにあらざるやにも思はる。果して然らば、反響の火の手は何處より揚がるならんか!? スポーツや競技などにはさまで興味を有せざる我れなれども、此一事だけは、特に我れのみに恵ぐまれたる唯一の愉快悅樂ならんか。

一、人は氣狂を見て嘲笑して満足し、氣狂は人に嘲笑されて笑ふものなり。然し嗤ふ者が是か、笑はれるものが非か? ——

眞理とは何ぞや!? 地球開闢以來無限數の學者や智者によりて一貫されたる最高究理の謂ひならんか? 果して然らば、かゝる光榮ある傳統の眞理や學界に向つて、無謀にも爆彈を敢て投ぜんとする我れこそは、天晴なる地球の大狂者なりと云

ふべきか。

荒海や舟を乗り出す船頭かな

(大正關東大震災第十周年紀念日、小田原夢遊閣にて著者)

第二版出版 贈呈の辭

余十六歳頃より禪に興味を持ち、平常丹田にて呼吸し、「萬物凡べて靈あり」と謂ふことを信じ、無心となり、呆郎となりて、天然自然を觀察、感謝、信念することに努めて今日にいたれり。

然して「人は己れに最適する趣味を早くより求めて夫れに精進し、以て己れの墓を造るべきなり」と云ふ言を處世のモットーとす。

仍て性感學の大成を以て、我墓たらしめんことを思ひつきて研究中、其道程に於て「原始時代に於ける人類及び人類の交尾期に就いての考察」の説を得たり。

其直後「人は満ち潮に生まれ、干き潮に死す」と謂ふ俚言の眞理を解釋する爲め苦心せし末遂に、靈質交合性原理を想案するに到る。廿有七年の信念の夢を結びたるやに自信するも、現代哲學や科學の了解を得る爲には、初め夫れ等を充分學ばざるべか

らず。然れども我が力、餘暇、興味、等無きを如何にせん。

とはいへ、眞理と自信するものを空しく放擲するか、又は長く私するに忍びず、殊に非常時日本國民の士氣を鼓舞する爲にも必要と思ひ、不備なる草稿のまゝを第一版として、昨年九月末我國學界の一部に贈呈したりき。

現代哲學や科學に對して悉皆逆説をなす此異端説が、認容さるゝとはさまで期待するに非ざれど、第一版は悪筆なる謄寫版刷にて判讀さへ容易ならざる程にて、亦凡べてに遺憾多かりしを以て、今回は訂正の上活版製本なして發行し、且つ我墓の一部たらしめんとする次第なり。

緒言にも記すが如く、豫言を發表することによりて、余の願望の大半は達成すると雖、靈質交合性原理の創案者としての老婆心より、解説のペンを採りしも、或は駄筆を弄し却て蛇足を添ふる愚の數々を敢てしたらんかを惧れるものなり。亦性來の諧謔癖を發揮して、欠禮に陥りし點も多々あることを思ひ、茲に恐縮の意をも記す次第なり。

追伸

此書を判讀されたる學者にして、御高見を有せらるゝ士は、著者まで御通報賜り度、第三版に納めて後世の參考に供し度希望するを以て、右懇願する次第なり。

昭和八年八月十五日

神奈川県小田原十字町四ノ八六三 (早川口 夢遊閣)

屑屋極道

東京帝大、理學部||物理學、化學、天文學、地球物理學、地震學、動物學、植物學
 (七部)。文學部||哲學、心理學、教育學、等(五部)。醫學部(五部)。工學部(二部)。
 農學部(二部)。計二一部。京都帝大(同上)計二一部。東北帝大(理、醫、工)計六
 部。九州帝大(醫、工、農)計六部。北海道帝大(醫、理、工、農)計八部。大阪帝
 大(醫、理、工)、六部。東京文理大、四部。廣島文理大、四部。早稻田大(文、理、

工)四部。慶應大(醫、文)四部。學術研究會議(天文、地球物理、化、物理、生物學農、醫、工)七部。女子醫專二部。

京城帝大。臺北帝大。東京工業大。旅順工大。(醫大)新潟、岡山、千葉、金澤、長崎熊本、名古屋、京都。(高等學校)第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、新潟、松本、山口、松山、水戸、山形、佐賀、弘前、松江、東京、大阪、浦和、福岡、静岡、高知、姫路、廣島、臺北、富山、浪速、東京府立。陸軍士官學校、同大學校、同軍醫學校。海軍大學校、同兵學校、同機關學校、同軍醫學校。精神文化。(以上各一部)

(第二便、新聞社)東京日々、東京朝日、時事、國民、報知、讀賣、大阪朝日、大阪每日。

右御中

第二版 俗通靈質交合性原理 目次

出版、贈呈の辭

緒言—靈質交合性原理漫談慢話

靈質交合性原理宣言書(三五五頁)

俗通 熱氣學

第一章 熱氣學の概念

一、熱氣學の定義

二、熱子の概念

三、熱氣學と電子論・熱子と化學元素

目次

四、陰・陽熱子……………五

五、同……………六

六、熱氣作用……………六

七、エーテル原子||冷熱子||陰熱子……………七

八、引力原子||燃熱子||陽熱子……………八

九、引力原子と地球燃熱子と地球……………九

第二章……………

一、摩擦||旋回運動||燃熱子製造……………一一

二、熱……………一一

地球引力の場……………一二

第三章……………

一、電氣の正體……………一六

二、エネルギー……………二一

三、電氣の陰陽性……………二三

四、引力……………三〇

五、酸素と窒素……………三二

六、電燈……………三三

七、太陽光線・星光……………三四

第四章 地球引力……………三五

第五章 天體の創生と人類の誕生……………三九

第六章 潮汐・光波即ち引力……………四六

一、潮汐……………四六

二、天體の光波は引力なり……………四八

第七章 地球……………五〇

一、地球……………五〇

目次……………三

目次

四

二、極光……………五三

三、地球の生命……………五四

四、地球の内部・地震・噴火……………五五

五、地球及び天體の自轉・公轉……………五九

六、低氣壓……………六一

七、赤道海流……………六二

八、エアポケット……………六三

第八章 熱帶と寒帯・太陽……………六四

一、地球に熱帯と寒帯とあるは……………六四

二、月光・太陽黒點……………六八

第九章 農學と熱氣學……………六九

一、窒素肥料……………六九

二、植物と動物……………七〇

三、植物の生育……………七二

四、肥料論……………七四

五、果實や植物の味……………七七

六、花の色……………七九

七、植木屋……………八〇

八、太陰曆……………八一

第十章 工學と熱氣學……………八二

原子親和力……………八二

第十一章 萬物無有論附靈子波……………八七

ラヂオ電波……………八七

第十二章……………九二

目次……………五

一、燃焼と窒素……………九二

二、氣壓・真空・眞空氣……………九七

三、電子論の錯誤・眞空氣(續き)……………一〇二

第十三章 最近の自然科学……………一〇九

第十四章 雜……………一一二

一、男子は陰性にして、女子は陽性なり……………一一二

二、……………一一五

通俗 無有哲學——無有教

一、用語……………一一九

二、人體と呼吸……………一二一

三、人體の新陳代謝……………一二二

四、胎兒と臍の緒……………一二三

五、肺と胃腸……………一二六

 肺及び消化器官

 胃腸の血液製造及び其吸收機能

 皮膚

六、ホルモン・靈魂・神經……………一三四

目次……………七

七、靈魂の種別……………一三五

八、昏倒と心臓麻痺……………一三九

九、消化器官と遊働靈子……………一四〇

一〇、神經衰弱症……………一四一

一一、神經過敏症……………一四三

一二、靈魂は精力の根源なり……………一四三

一三、狂者は大力にして亦大食家たり……………一四四

一四、睡眠は何故絶対必要なるか……………一四五

一五、大酒家は早起きなり……………一四九

色事仕は朝寝坊なり

一六、靈魂||神經と太陽と無有哲學……………一五七

一七、心臓と肺臓……………一五八

一八、寒冒 頭痛・熱・寒胃療法……………一六〇

一九、肺病……………一六四

肺炎

二〇、心臓病……………一七二

二一、熱帯病……………一七四

二二、飲食物と靈子……………一八一

二三、女子に月經ある理由……………一八六

嫉妬心の科學的考察

男子に月經無き理由

女子の身體

二四、月と農業……………一九五

二五、何故人は満ち潮の頃生まるゝや……………一九六

二六、何故人は干き潮の頃死するや……………一九七

二七、靈魂は何處より去るか……………二〇一

二八、人事不省の人……………二〇三

二九、靈子の正體・靈魂の本質……………二〇六

(一) 靈

(二) 記憶力・度忘れ

(三) 少年時代の記憶

(四) 中年後の記憶

(五) 三位一體は非なり

(六) 意と情

(七) 本能と遺傳

(八) 意識と身體運動は反射作用をするものなり

- (九) 腰がぬける理由
- (五) 決斷力
- (二) 直觀力

三〇、屑屋式本能解剖表……………二二四

- (一) 直觀
- (二) 觀念
- (三) 官能・衝動
- (四)

三一、受胎と遺傳……………二三〇

三二、人類の靈魂量増大し文化發達せし理由……………二五三

笑の起源

三三、夢……………二五七

三四、靈魂||靈子波動……………二六一

(一) H
-||エーテル原子||靈子波動

(二) 石の地藏に靈魂ある理

(三) 死後の靈魂

(四) 幽靈

(五) 崇り

三五、記憶の検討(例)……………二七四

三六、腰のぬけた話……………二七八

三七、治療篇……………二七九

(一) 病氣の源因

(二) 催眠術療法||他動的靈子療法

(三) 自己催眠療法||自動的靈子療法

附、信心療法

(四) 鍼術

若返り法と性ホルモン

(五) 灸術

長命の灸

(六) 治療法

(七) 脈と長壽法

(八) 食ひ合はせ・中毒

三八、古代心理學說と無有哲學……………三二二

三九、無有教……………三二六

(一) 宗教篇

(二) 日本國民に寄する文

(三) 廿世紀の先進文明國と眞似を嗤ふ

(四) 眞の高度文化

四〇、(第一版より抜萃轉載)……………三五八
 四一、真理姫小唄……………三六八
 四二、遺傳學と榮養學に就いて……………三七〇

緒言

地球開闢以來未曾有の學界大地震

現代理學、醫學、哲學、の高等理論を根本から覆へし——夫れらの方向
 轉換を期せんとする

靈質交合性原理漫談慢話

皇紀二五九三年建國祭日

JOKER・RAGMAN 屑屋極道

余の創案した靈質交合性原理は

熱氣學(科學)

無有哲學(哲學)……とも云ふ。

宇宙及び萬物は凡べて、左の二種の熱子によりて成生、合成又は存在する……と定義する。

一、エーテル原子 \parallel 冷熱子 \parallel $-H$ (陰熱子)。(然れども無有哲學にて人體、靈魂、等を論ずるときは、此エーテル原子を、單に靈子と云ふ。)

二、引力原子 \parallel 燃熱子 \parallel $+H$ (陽熱子)。

三、此陰、陽熱子は、同性は相互に牽引し、異性は反撥又は交合の熱氣作用を惹起するものとす。

二

此原理によつて左の事項を説明することが出来る。

一、太陽には、地球の如く、地殻及び空氣より濃密度の大氣がなければならず、従つて生物の存在も可能なるべきこと。

亦太陽を首じめ光輝ある恒星、遊星等は凡べて、地殻ある爲にこそ、斯かゝる光輝を發散するものなること。

二、太陽光波は本來、寒冷なるエーテル波動なるも「地球引力の場」 \parallel 空氣存在の場内に入り來りて初めて、引力原子 \parallel 燃熱子(空中の酸素等)と交合、交接して熱氣作用を惹起し、爲に光線或は熱線と變化するものなるべきこと。

電子はエーテル原子

陽核は引力原子

に近似或は該當し、

水素、窒素、等はエーテル原子 \parallel 冷熱子

炭素、酸素、等は引力原子 \parallel 燃熱子を主體とする、兩原子即ち兩熱子の交合或は化合する元素なること。

天體引力は光熱、燃燒するものであり又、光波 \parallel 引力波なるべきこと。

三、地球が自轉及び公轉する理由。

四、電氣及び各種エネルギーの正體。

五、理學、化學、天體及び地球物理學、地震、噴火、等に関係する新學說（以上熱氣學）

六、精神 \parallel 靈魂の正體。

七、人體は78%の燃熱子と21%のエーテル原子 \parallel 靈子、から成らざるべからざること。

八、人の呼吸は、 $-H$ を主體とする窒素を吸入するが主目的にして、 $+H$ を主體とする

酸素吸入は従たるべきものにして、從來の醫學説は全然誤謬ならざるべからざること。

と。

なるが故にこそ、月經が潮汐作用 \parallel 天體の引力作用と關連し、亦古來、分娩は満潮時頃に、死亡は干潮時頃に——等と謂はれた理由。

九、靈魂は所謂精神と同一にして、人體内のエーテル原子 \parallel 冷熱子 \parallel 靈子の結合物質にして、

神經は靈魂即ち靈子の分散したるものであり、又身體内の78%を占むる燃熱子が、燃えることを、冷やかにして抑制する作用を有するものなること。

凡例

妙齡の女は、ハッ！、恥かしいと意識する瞬間、彼女の顔面神經は腦部に集中するを以て、即ち冷熱子 \parallel 靈子の抑制より逃れた顔面燃熱子は直ちに其習性を發揮して燃え出す、これ彼女の顔に紅葉する所以である。

彼女は益々羞恥の意識を増せば増す程、身體内の神經（ \parallel 遊働靈子）は腦部に動

員集中されるを以て、遂には彼女の身體迄も紅葉する結果を招来するものである。

これ女子が男子に比し、靈魂質量尠きためであり、亦靈魂のうち根本靈魂の質量尠き女性は直感力強きものでもある。(尙無有哲學にて詳論するであらう。)

胃の機能(?) 神経が故障を惹起すれば、それによつて抑制されていた結締組織中の燃熱子は、其習性を發揮して忽ちにして燃え出す——これ所謂胃潰瘍である。

夫れが更に悪化すれば遂に、かのおそるべき胃癌となるものである。故に胃癌は胃の内皺の結締組織(?) か細胞(?) 中の燃熱子結合體即ち燃えガラである。

鍼術は、此故障した神経に刺戟を與へて復舊する方法であつて、初期の胃癌ならば本復さすことが出来る筈である。故にたいいていの病氣の根治には、鍼術は理想的なれども、其昂進せるものに對しては比較的長時日を要するものである。然し現代醫學に比すれば數等效果的であらう。尙詳しきこと及び灸のこと等は、後章無有哲學にて説明するであらう。

古來病氣は氣からおこるものと謂はれるが、氣||精神||靈魂||神經及び筋である。

將來の醫學は、無有哲學を基礎として、脈、神經、鍼灸術、按摩或はマッサージ、各種の神經又は靈療法、漢方藥、等の研究、應用に進展するであらう。之れに由つて觀るも如何に、我等大和民族が甚大なる恩恵と矜恃を有するか判然するであらう。亦西洋文化を基調とする現代醫學が既に行詰まりつゝあることの當然なる理由も首肯出来るであらう。

一〇、病理學、榮養學、受胎論、遺傳學、心理學、哲學、宗教、等に關係する新學說。等々くく

二

科學の忠僕を常識と云ふ。

デーゼル機長たる我友は、余の斷片的なる語を聞き、或は神秘的なる事柄等に就いて質問を試み等して、余の說を支離滅裂だと嗤つたが、余が若し、理學をやれば大理

學者に、醫學をやれば大醫學者に、哲學をやれば大哲學者に、なり得るであらう。そして、現代科學の優秀なる忠僕たる此友が、充分首肯出来る程の説明も可能であらう——と自信する。

然れども斯かゝることは余の希望するところではない。余の念願は、常識人と謂ふ忠僕の旦那筋たる科學者、哲學者、等の無智蒙昧を拓くために、ヒント即ち暗示を與へることにあるのだ。不幸にして余の力足りなくて、若し現代の學者を啓發すること不可能なる場合と雖、敢て余の恥でなく、寧ろ余の説を認識する能はざる人士の耻辱たるのみ！無能力者に説明しても、彼が納得出来ない場合を想像すれば如何？

三

昨年一月廿三日此原理を創案、宣言したばかりであり、亦船務や雜務に忙殺され等して甚不完全、不充分ではあつたが、——非常時日本帝國の爲にもと考へて——其草稿を昨年九月末、我國學界代表機關としての東京帝大（理、醫、哲）に學位申請論文

の形として提出し、尙念のため其一部宛を、京都、東北、大阪の各帝大、學術研究會議、等へも贈つたのであつたが、五ヶ月をすぎる今日まで、何等の反響も見聞しない點から觀れば、どうやら、誇大妄想狂者のタワ言視されたのだらう……とおかしく思はざるを得ない。

いつの時代でも、豫言者が、とかく容れられないのは是非もない。ア、！

玉磨かざれば光なし。

磨いて光澤を有するが故に寶玉である——と云ふのみでなく、玉の本質如何が、最大肝要點或は根本問題でなければならぬ。

然るに、磨いて光らす役目の、我國の象牙の塔の職人達は——サマエの殻に閉ぢこもる——墮眼好きの無精者か、或は、寶玉のカンシキの出来ない、エセ職人であるからだらう。

いつになつても、仕入れの玉しが、手かける自信がないとは！ サツテモ〜。？

!?!?!?!?!。

四

「エーテルと相対性原理の話」

石原純博士の、右の著書を参考して、左に我説の一端を披瀝する。(斯れは熱氣學で説明すべき筈のものを、假りに茲に記すこと故、讀者の了解至難なるかも知れないことを懼れる次第である。然し此くらゐの智識や、亦電子論の概念等も用意するだけの人士に非れば、我原理の説明納得も容易でないかも知れない、ことをも附記しておく。)偉大なる科學者フレネル、や、ケルヴェインの畢生の努力も遂に水泡に歸して、エーテルが現代高等理學から、其光輝を漸次ひそめんとしたのは、左の如き理由であつた筈だと思はれる。

「エーテルに彈性がある上は、天體の運動に抵抗しない譯にはゆかない。それに拘らず星學は、天體の運動に關して斯様な抵抗の痕跡すらないことを示して居るのは、何

故であるかと云ふことに關しては、さすがのケルヴェインも多少、解釋に苦しんだやうであつた。六四頁」

然るに我原理に謂ふ「地球引力の場」内では——空氣の如く——エーテルも亦、同じく静止状態にあるべき理。

及び「地球引力の場」の限界附近周圍のエーテルが——地球、及び、夫れと共同に廻轉する「地球引力の場」とが、共に高速自轉することによりて——激動亂し、爲に地球エーテル光波を惹起して、宇宙に發散、傳播するものであり、従つて地球も亦他の遊星や、恒星の如く光輝ある光りを、他の天體上に美々しく耀かす——即ち地球を首じめ火、木、金星等の遊星も亦、太陽や恒星の如き光源體なり——と云ふ理由、等を説明することが出来るのだ。

現代科學は「太陽は灼熱球であり、遊星や月の光輝は、其反射による……」との非科學的誤謬假説に立脚していることに、從來少しも氣付かないから「星學は天體の運

動に關して、斯様な抵抗の痕跡すらないことを示して居る——」と、甚大なる認識不足をするのだ。

我原理は、太陽光線を首じめ彗星、遊星、等の燦然たる光輝は——所謂エーテルの彈性たる抵抗によるものである、と云ふに等しい。

又、我説の「地球引力の場」内では、前述せし如く、エーテルも空氣と同じく静止状態にありて、**流れないから**、かの著名なるモレー、マイケルソン兩氏の「光りの干涉の實驗も當然不必要であり、従つて其結果を觀て立論の基礎とするローレンツ收縮、ミンコフスキーの四次元空間——物理學的世界、アインスタイン博士の相對性原理、等も尠しも要用としないのだ。

アインスタイン博士の一九一一年の豫言に對しては、其數理學的功績に對してだけは敬意を表するに吝ならざる余であるが、同博士の「光線は空間にては彎曲するものだ——」との結論には感心しない、否、絶対に肯定出來ない。我原理によつて、太陽

を首め全天體には、各特有の大氣が存在せねばならぬことが説明出來る筈故、地球の空氣より一層濃密度の大氣存在する太陽の近くを過ぎる、**水星の光波即ち光線が屈曲する**のは、寧ろ當然のことであつて、何らの不審も、屁理屈も少しも要らないのだ。

斯かることは、余が茲に今更ら喋々するまでもなく、我草稿を觀られた、心ある學者なら、當然氣もつき、興味も湧き、亦多少の輿論も惹起されていゝと想ふのに！

いつたい、**我國の象牙の塔の職人のうちには、現代科學の高等理論が、如何なるものか、眞から判る程の學者は居らないものか！**?

昨年暮、多年の船頭稼業から——アト數年辛抱して退職さへすれば、一生涯の生活の保證は充分つく筈なのを、犠牲にして——足を洗はんとした際、泣いて余の無謀を諫止してくれた友に對して「心配せずに、心よく出立させてくれ。我信念故には、一生氣狂披にされても任んずるのだ。亦いくら西洋學術妄信、追従の我學界でも、我原理を多少なりと理解する程の少數學者くらゐは居るだらう——」と云つた余は、阿

呆だつたのか、氣狂ひだつたのか。

平常、高位高官にして多額の俸給を賜はり、殊に、昨年から多額の御内帑金をも賜はりて、學術振興協會とやら云ふものまで、つくつた筈の學者先生様が、?!?!?!

九寸五分の使用が禁じられている今日の日本は有りがたいかな。然し、非常時日本の爲には、我國武士道の華たる斯の九寸五分の使用を許すところを、最大肝要事の一であらう。

相對性原理の創案者は、其原理を了解する學者の數は、世界に指を屈する程しか居らない——と、御得意のやうだかに承つたが、苟しくも眞理と云ふものは、そんな難解なものではない筈、亦難解であつてはならない筈だ。糸は縫つれさす爲に益々解さにくくなり、偏理屈を意地張れば愈々邪道に陥ちて行くものである。奇道や魔術に、眩惑され、萎縮する我國の象牙の塔の學者先生様の心には、眞理の姫の面影は寫つら

ないのかも知れん！ 實に色氣なしこそ是非もない。

五

余が最も心服する千古の大哲人は、無名のトランプの創案者唯一人である。

哲學がキング、科學はクキン、大哲人大科學者はチャック、日本の學者先生様は、差當りコンマ以下の四、五、六點餘のガラと觀ることが出來やう。現代科學、哲學に門外漢たる余は、一點即ちポイントにも値しないジョウカアである。クキンたる現代科學は嬖天下で、キングたる哲學を臂へに堂着たらしめて得意然たりだ。此ヒステリックなるクキンに眞面目で説教すると、勞多くして效驗空なし。仍こで、デョウカアたる我輩は、惡口ついたり、威張つたり、等道化役をつとめやうと思ふ。

鯁鯁然たるくせに、道化芝居はとかくお好みにならぬ我國の老大學者先生様方には、至つて不向きかと思はぬでもないが、此書の讀者たる若き有望な學徒のうちには、眞の眞理が如何なるものかを判明することや、亦其研究に熱心な人士も有ると思ふの

で、持つて生まれたギョチない文章ではあるが、ペンをとることにした次第である。非常時皇國が聽て、地球の維新科學の日の本になるか、どうかは、我原理を研究、應用する眞摯なる若い學徒の強ジンなる双肩と勇氣とに、かゝるであらう。夫れ等の若人達の前途を祝福するために、左の言を呈したい。「無心となり、阿呆となりて、天然、自然を觀察せよ！ 感謝せよ！ 信念せよ！」

多年浪風を友としつゝ世界の港々を流浪した此船頭も、今後は、夫れ等若人達のために、學界に舟をすゝめるでもあらう。

六

廿世紀迄の理學の父とも謂はれるニウトンは「物理學には一切假定をつくらず」と豪語したかに云はれるが、然かも其物理學が「太陽は灼熱球であり、太陽光波は本來の光線であり、亦熱線である——との、一大假定のもとに成立しているから面白い、そして夫れについて何等の不審も、一九三三年の今日まで惹起されないとはい！！！！？」

！！！！！！！！

これ現代高等自然科學は過學なり——と、敢て余が笑ふ所以でもある。棒を空中に強振すれば音を發す、理學はこれを「物質たる空氣の抵抗ある爲なり」と謂ふ。亦「地球は高速度で、西から東へ、自轉しつゝあり」とも謂ふ。然れども、何故、空氣が静止状態にあるか、或は地球自轉による音を發しないか等については、其理由を闡明にすることが出来ないやうだ。電子論では、多少説明可能なるかに聞くと、電氣の正體さへ未だに發見し得ざる現代理學のこと故、果して事實か否か、疑なきを得ない。實に神、佛を否定する現代科學こそは、臆面もなく「神祕大明神」を祀るものなり——と擲論されても、おそらく辨疏の辭に困惑する次第でもあらう。

現代自然科學は、あまりに現象學に墮しているやうに私は思ふ。現象物理を演釋して成立する各々の學を綜合することによつて、眞理の究極に到達することが可能なるかの如く一般に謂はれ亦信じられもしているが、果して夫れで目的を貫徹することが

出来るであらうか？ 余はお氣の毒ながら、否かと斷言せざるを得ない。

別け登る麓の道は異なれど

同じ高嶺の月を見るかな

此麓の道に、手を取り合つて迷ひ續けているのが、現代迄の科學や哲學なのだ。化學が燃焼には酸素は絶対に必要にして、窒素は不要なり——と云へば、醫學は夫れに早速追隨して、人の呼吸するは、空中の酸素を吸入する必要のみの爲だ——とコジツケるが如しだ。現代科學殊に醫學が行詰まるは寧ろ當然のことであらねばならぬ。亦、現代科學や哲學に、精神—靈魂の正體が発見不可能なもの、何ら不思議ではない。

右の場合、道に迷ふ人達に必要なは、眞如の月光を照らして、彼等の辿る道を明るくしてやるが最良の手段、方法でなければならぬ。我靈質交合性原理こそは實に、此眞如の月の役目を、充分つとめるであらう、ことを確信して豫言する次第でもあ

る。

七

燧石を持つて、鐵片を打てば火花が出るが、其火花は、

鐵片からか？

燧石からか？

理學は、急激な摩擦によつて熱が発生し、従つて、火花が出るは當然だ！として、何等の不審さへ起こさうとしないのは、どうしたことか？ 我妻は、夫れを電氣作用の一種だらうと云ふ——電子論者は、如何に説明するか知らないが——夫れが電氣現象と多少相違することは、實驗容易であらうと思ふ。

燧石を打つことは、相手は鐵片でも、亦他の燧石でも差支ない。要は打つ燧石の分子即ち粉碎破片を、勢ひよく飛散さすことに有るべきであらう。此場合、相手たる鐵片は、燧石に比し硬度高いから、打つ燧石の飛散する粉碎分子は細かく亦其勢ひもよ

く、従つて燧石で燧石を打つよりも、鐵片を打つことの方が、火花も多くて、然かも美しい。

さて、此飛散した燧石の粉碎分子自身が、急激なる摩擦による熱の爲め燃焼でもして、斯かる火花を發する——とでも、現代理學は云ふであらうか？ 此燧石なるものが、ダイヤモンドの如く炭素とやらの結晶でも有つてくれれば問題は尠ないが、事實は然らずだから、現代理學の爲には、オアヒニクサマとでも云ひたい。

鐵と鐵との急激なる摩擦ならば、燧石に比して、飛散する粉碎分子も細かく、亦其飛散する勢ひも烈しく、火花も多く、且つ美しいものだ。(然し摩擦エネルギーは勿論莫大に要するが)。

硝子の面は平滑だから、打つ燧石の分子を粉碎、飛散させることが出来ないから火花も出ない。燧石の代りに、硬度の低い即ち軟かい石を持つて、鐵片を如何程急激に打つとも、石の粉碎された分子は多量に飛散するが、勢ひも弱く亦火花も出ない。

ハテ、サテ。然らば火花になるは何物ぞ!?

たつた此くらゐのことにさへ、神祕大明神のお袖の蔭にかくれねばならぬ現代物理學や、化學とは! ?!?!?!?!?!

此場合、飛散した粉碎分子が、其勢ひで、周圍の眞空氣の燃熱子や、空氣中の酸素を燃やす、即ち熱氣作用を惹起する、故に火花が發生する——と説明する我説は、果して荒唐無稽の説だらうか。若し此我説を肯定する學者なら、それによつても、本來冷めたき太陽エーテル光波が、地球引力の場内に入り來りて、空中や地上の燃熱子(酸素や炭素)と、熱氣作用を惹起するために、(即ち傳播の偉大なる勢ひで燃やして)——太陽光線となる、と云ふ我原理の一端位は首肯出來る筈と思はれるのに。亦電の光は電氣を多量に有する二つの雲の所謂火燧石現象であるのだ。

八

太陽は灼熱球であり、其エーテル光波は熱線や光線である——、夫れが眞理と思は

れた昔はよかつたが、文化が進むに従つて、熱帯でもヒマラヤ高峰上や、成層圏即ち上空に上る程、漸次寒冷なる事實が判明した爲に——此不合理或は神祕を屁理屈つける爲に——考案された結果が「太陽熱輻射」と謂ふコジツケ説なのだ。上空一萬七千米の成層圏では、気温は攝氏零度以下五〇乃至六〇度餘有りとのことだが、地上に下降するに従つて温度上昇するは何故ぞ？ 夫れを單に、太陽光線の輻射作用に由來する——と説明するだけで、何等の不審も今日まで起こさうとさへしない現代の高等理學は、いつたい正氣か？ 低腦か!? 僅々一萬七千米間で、気温九〇度餘の差を惹起する原因をさへ釋然たらしめざる、物理學や化學とは!?!?!?!?!?

此場合、吾人に知られたる顯著なる事實は、空中の酸素及び引力が、

上空に行く程稀薄になること。

地上に下降、接近する程濃厚となる。

ことである。仍こで、急激に鐵片を撃つた燧石の、飛散した粉碎分子が、其勢ひで周

圍の燃熱子や酸素に作用して、火花を發生するが如く——地球の如く、地殻や大氣の存在する太陽及び太陽引力の場とが、共に高速自轉するために、太陽引力の場の限界附近、周圍のエーテルが激動亂し、以て強力無比なる太陽エーテル波を惹起して傳播し、地球の引力の場内に入り來りて、其勢ひにて酸素（及び引力等に）熱氣作用即ち火花發生に相似の作用をする爲に、太陽熱や光線を現出するものである、と云ふ我説を肯定することは、現代科學には出來ないものか？

今假りに、直徑一呎の球あり、夫れを距る一萬九百呎の地點に、直徑百九呎の熱源球||發光體を置いて、其一呎球の表面を照らすとせんか、其表面は殆一樣に等温度であり、途中の温度は、熱源球に近づく程、高温度なる理は、何人も想像つくであらう。此比率は、太陽の直徑は、地球直徑の一〇九倍、其距離は地球直徑の一萬九百倍あり——と云ふ天文學から借用した。

熱帯、寒帯の存在は、太陽光線の角度や、太陽からの距離、等によると理學は教ふ

るも、太陽の視半徑——太陽半徑を一邊とする、地球上の一點とに畫く直角三角形の仰角——は、只僅少なる零度十六分しかない。夫れを逆に考へて觀れば如何?——太陽直徑一〇九呎ならば地球直徑一呎、

同 一〇尺九寸ならば、同、一寸

同 一尺九分ならば、同、一分

日常實際觀察する如く、太陽を直徑一尺九分餘の灼熱球と假定するなら、我等の親愛なる地球は、吾人の指先きにも樂々と乗せ得る可愛らしい、只僅かの直徑一分の球にしかすぎない道理なることに、思ひ當ることが出来るなら、

一、太陽及び太陽光熱、

二、地球表面及び空氣、

の何れか、或は其何れもかに、或不思議か又は神祕が隱蔽されて居るかも知れん!と當然氣付かねばならぬと、余には思はれるのに。そして、余がくどくしく云ふま

でもなく、心ある人ならば、亦左のことにも當然思ひあたるであらう——。

太陽が現代科學の謂ふが如き灼熱球ならば! 地球は熱帶も寒帶もなき常夏の樂園か、或は暑熱地獄ならん、然して、ヒマラヤ登山家や飛行家、等は防寒服の代りに防暑仕度をせねばならぬであらう! と。

太陽熱輻射に就いて物理學書に曰く「——太陽の中にある熱は、此洪大な宇宙真空の部分を通じて地球へ到着する。熱は物質を離れて存在することは出来ないから、太陽の中にあつた熱は此真空の部分は、熱でなく進行して吾人の地球に達し、空氣、地面、等の物質に吸収せられて再び熱となつて其溫度を上昇せしめる。即ち高溫度の物體にある熱が、途中熱でなく進行し、物體に吸収されて再び熱となつて表はれる移動の方法を熱の輻射と云ふ。——」

「太陽より熱の地表に達する場合の如く、中間の物質の媒介に依頼することなくして、周圍に熱の傳播する現象を熱の輻射と云ふ。

——夏日地上の暑きに拘らず、飛行機に乗れる人が冷を感じるは、空気が地面より輻射熱を吸収すること僅少なるに基因す。——」と。

浦島太郎は龜に乗つて龍宮に遊び、太陽熱は媒質エーテルにオンブされて、地球に天降り、空気が地表に、再び熱として神秘的に、忽焉として出現する（？）現代の高等物理学や化学は、よほど童話や神祕物語が好きなさうな。天文学の書を觀て余が、太陽が灼熱球たることを屁理屈つけるための現學説に抱腹絶倒するやうに、後世の科學者や常識人等も、此興を俱に感ずるであらう。

九

月光は、太陽光線の反射なりと謂ふ。然らば假りに、地球の晝（太陽の直射している）を、月や他の天體上から觀察した場合を想像すれば如何？ 或人は「月光の如く朗明に光るだらう」と云ふ。其の理由を問へば、「月を首め火、水、金星などの遊星が、あんなに光輝する點から觀れば、地球も當然光る筈である——」と云ふ。海面又

は水面に於て、太陽の直射しているときには、其直下方だけが實にマバエイものだ。せめて地球の表面全體が、斯くの如くマバユク光輝するものならば吾人は、夫れを以て推察することによつて、君の右の説を肯定出来るけれども——、ピカール教授の昨年の實驗にても知られるとほり、成層圏近く昇つても、雲にかくれないかぎり、地球表面は、山は山、海は海と、——吾人が日常目にすると同じく——見ゆるとのことではないか？ と反問すれば、「現代天文学では、其位の説明は充分出来ると思ふけれども自分には判らない。或は神祕作用によるかも知れん——」と逃げるを常とする。常に斯んなに信賴される科學こそは伴せものであり、科學者にはなりたいもんだ。或人は、右の説に反して「光るまい！」と云ふ。寧ろ、正直者よ！ と、余は苦笑する次第である。電送寫真やテレヴィジョンの發明せられた現代では、今少し科學的に考察することも出来る筈だと想はれるのに！ ？！？！？！？！

余は月光について、太陽光波の反射作用或は干渉作用は認めるも、太陽光線の反射

作用は否定するものである。光線と光波とは當然區別して考ふべきものであり、尙詳細は熱氣學にて説明するであらう。

一〇

従來の學說では、エーテルは光波や電磁波、等の媒質として考察されたが、余の説は左の如くである。

エーテル原子 \parallel ^Hが、旋回運動エネルギーを得れば、^H \parallel 引力原子 \parallel 燃熱子に變質し、逆に、

^H \parallel 引力原子 \parallel 燃熱子が、其旋回運動エネルギーを滅亡すれば、^H \parallel エーテル原子 \parallel 冷熱子に還元する。——と云ふ。仍て、

太陽光波・月光波・星光波・靈子波動、等はエーテル原子波動、

電磁波等は、引力原子 \parallel 燃熱子波動——と云ふ。又我原理は、哲學的には、エーテル一元論 \parallel 靈子一元論なり——と云ふことが出来る。

一一

(豫言者は奇蹟を示さねばならぬのか?)

現代高等理學はドコまで阿呆なのか?

物質を摩擦すれば——熱が発生し——或は、——帯電状態を惹起す——

さて其——熱と云ふものは——或は、電氣と云ふものは——

と、シカメヅラしく、コムヅカしく論究して、得意然たるが現代高等理學なのだ。

然れども、摩擦すれば何故、熱や電氣が発生するか!? 其根本理由は尠しも闡明にしようとはしない。故に、實に、現代理學こそは、没理の現象學であり、亦單なる現象の物理學でもある。根本を極めずして、徒らに末節のみに拘泥するものこそは、是れ天晴低腦者たる特徴であらねばならぬ! っ!?!?!?!?!?!

一二

二物質を左右の手に持つて摩擦する場合を按ずるに、摩擦は——兩手の前後、左

右、上下、等への——方向運動である。

細粒丸を掌の下に置き、掌の方向運動をなさば、其細粒丸は廻轉又は旋回運動をす
るであらう。仍て、其細粒丸から観れば、

摩擦——方向運動——旋回運動であらねばならぬ。

「エーテル原子が、旋回運動エネルギーを得れば、引力原子——燃熱子に變質し——」

此我説によれば、摩擦——方向運動——旋回運動こそは、引力原子——燃熱子の製造手段
又は方法であるのだ。故に高速自轉即ち旋回運動する地球こそは、地球引力原子——地
球燃熱子の製造、生産業者で有ると共に、夫れに作用する宇宙エーテル原子との熱氣
作用によつて、地球は自轉する、即ち因果關係を蘊釀し、以て、我等の地球は永遠に
旋回運動を繼續する、巧妙極致の作用を有するものにして——現代科學の謂ふが如
き、冷却しつつある、又は退化中の——斯かる安ボイ地球では斷然ないことを、余は
主張する次第でもある。

月は既に冷却したる殘骸なるやに謂はるゝも、月の旋回運動に基く月エーテル波動
は（月の質量が尠き爲めに其自轉速度も亦低く）、地球引力の場に入り來りても、單獨
にては光波としての熱氣作用を惹起するに不充分なるため、太陽エーテル光波の反射
或は干涉の援助なしには、月光波たる能はず、故にデッド即ち死したるかの如くに科
學者に云はるゝも其實、月は月なりに其活動を永遠に繼續するものにして、デッドし
たるは從來の地球の科學者の腦力のみ。

太陽は質量甚だ大にして太陽引力原子も莫大にして、それに熱氣作用する宇宙エー
テル原子の量も力も偉大にして、従つて其旋回運動エネルギーも大なるため、それに
由來する太陽エーテル原子波動も強烈にして、地球引力の場に入り來れば、地球燃熱
子との熱氣作用も熾烈にして、恰も本來の灼熱球であるかの如くに、今日まで地球の
科學者や人類を眩惑し、翻弄して來た程である。（例せば、電送すべき寫眞に、甚だ強
すぎる光りを照らして電送すれば、其ネガチブは眞黒くなりて、更に現像すれば只白

色の無影像にすぎざるが如くに)。

空氣があり、生物が棲息するは地球のみなるかの如く亦凡べてに我執とうぬぼれが強く、頑迷でもある地球の科學者達は、余の原理や説を聞くとともに、茲幾年か或は幾世紀間かは、彼等の迷蒙を啓發することは、よう出来ないのかも知れん。ア、!

亦、發電子の巡回運動により電氣を發生するダイナモも地球の如く、⁺H || 引力原子 || 燃熱子の製造機械であり、電氣は巡回運動エネルギーたる引力原子 || 燃熱子でもあるのだ。

熱氣學にては、

- (一) 重き物、有色の物は、燃熱子を。
 (二) 輕き物、無色、透明の物は、エーテル原子を。——割合上、多分に含有するものと定義する。

故に、鐵は燃熱子を多分に含有するものである。夫れを、何かで摩擦するとせば、

摩擦 || 巡回運動 || 燃熱子製造法

なるを以て、鐵の⁺H || 燃熱子量のみ漸次増加し、爲に鐵を組織する⁻H || エーテル原子と、⁺H || 燃熱子との原子親和力或は分子化合力の統制を亂されるに到る。——これ所謂熱の發生である。故に熱は⁺H || 燃熱子の増加によりて發生するものである。

硝子や絹布は、割合上、⁻H || エーテル原子を多分に有する物質である。夫れ等を相互に摩擦するとせば、摩擦による⁺H || 製造燃熱子と、性來の⁺H || 含有燃熱子とが、同性牽引して結合して、其⁺H || 量を増加することによつて、熱を發生する力よりも、——性來多分に存在する⁻H || 含有エーテル原子と異性反撥する力の方が、より大にして、摩擦による⁺H || 製造燃熱子は、硝子や絹布に吸収——傳導、散逸——されること尠くして、却て硝子や絹布面に残留、蓄積されて、所謂帶電状態を惹起即ち電氣を發生するに到る。由之觀是、電氣こそは、巡回運動エネルギーの蓄積又は蓄積によつて起る現象にして、余の學說の⁺H || 引力原子 || 燃熱子の一部である。尙詳細は熱氣學にて

更めて検討するであらう。

「無ヨリ有ヲ生ゼズ」と生意氣云ふ現代理學が、「無ヨリ生ジタ有」にも等しい筈のものを、——熱よ！ 電氣よ！と夢中になつて憧憬するのも面白い。

電氣の+、-には

- (一) 電流の流れる方向によるもの、
- (二) 電位の差によるもの

との二つの場合しかない筈なのを、

硝子棒様電氣(陽性)

封蠟棒様電氣(陰性)

等と、殊更に、神秘的陰陽性でもあるかの如く認識不足や錯覺する等、よろづに迷蒙を續ける現代高等理學は、ドコまで阿呆なのか!? ?!?!?!?!?!

一三

青い莖と葉、黒い根や土の爲に成育する植物に眞紅の花が咲く。其植物が食物になれば赤い血に變化する。枯れた植物はよく燃えるし亦肥料にもなる。石炭は植物の變化したものとかな。火の色も赤色なり、赤色は燃焼を象徴する色である。等實に、甚不思議な現象と云はねばならぬ。だのに、斯かることは自然の攝理であり、當然のことであるとして、何らの不審も珍奇も持たうとしない現代科學や常識は、尙更ら不思議だと云はねばならぬ。?!?!?!?!

現代理學の父ニウトンは落ちるリンゴを観て、地球引力作用に據ると喝破した。彼こそは天晴當時の氣狂ひか特別な智慧者であつたに違ひない、何となれば、其當時までの科學や常識から觀れば、落ちるリンゴはアタリマへのことで、何らの不審、不思議はなかつた筈なのだから——。

今度は科學が、地球引力説を常識として固着して、夫れに満足するばかりで少しの不審も抱かうとしないから、現代理學の高等原理はニウトン時代の夫れとたいした進

化はしてゐない。萬有引力なんて萬有コジツケに都合のいい屁理屈に陶然としてるので、此大狂者から阿呆や低脳扱ひされるに到る。實に自己陶醉や模倣に満足する者に進歩、發展なく、不審や疑問の掘サクに奮闘、熱中する士によつてのみ偉大なる發明、発見は完成されるものである。一^H|| エーテル原子が、旋回運動エネルギーを得れば^H|| 燃熱子に變化する」と我原理は謂ふ。故に高速度自轉する地球こそは^H|| 燃熱子の製造、生産業者であり、ダイナモの高速廻轉によりて發生する電氣も亦燃熱子である。又我原理にては、萬物は凡べて一^H|| エーテル原子と、^H|| 燃熱子との結合、交合によりて創造或は組織されるものとす。故に青い植物に赤い花が咲き、植物が食物になりて赤い血液になり、植物が石炭になり、或は枯れて燃え易くなり、又は、スマシタ夫人や、屁理屈を云つて氣取つたりする女史達に、毎月赤い月經があつたからとて、少しも不審、不思議ではない。それこそ眞の當然であるのだ。

燭光大なる電燈と、太陽の色とが、近似たる灼熱又は白熱色を呈するからとて、亦

不思議ではない。電燈はダイナモの製造する燃熱子の作用であり、太陽熱の方は地球が生産する燃熱子の作用で、本を洗ひば同じ^H|| 燃熱子作用だから少しも不審はないのだ。それよりよほど不審、不思議なのは、太陽を灼熱球とし、太陽光線を本來の熱線として等、萬づに智識ぶる地球の科學者の腦力や態度なのだ! ?!?!?!?!?!

「注意」

我原理は全部眞理か、或は悉皆虚偽か、のドチラかで有らねばならぬ。一部眞理で他は虚構だ等と云ふことは絶対に有り得ない。若しかゝる學者が有るならば、未だ我原理を了解する程の力なき人と云はねばならぬ。然し蛇足たる末節のことは此かぎり
にあらざるなり。

通俗熱氣學

第一章 熱氣學の概念

熱氣學の定義

熱子には

エーテル原子 \parallel - (陰) 熱子 \parallel H \parallel 冷熱子

引力 原子 \parallel + (陽) 熱子 \parallel H \parallel 燃熱子

の二種あるものとす。

冷熱子が、燃熱子に交合交接する作用を熱氣作用と云ふ。

右の熱子及び熱氣作用に就いて研究又は検討する學を熱氣學と云ふ。
無有哲學にて靈魂及び人體等を論ずるにあたりては、エーテル原子 \parallel 冷熱子を、單に靈子と謂ふ。

エーテル原子が、廻轉又は旋回運動エネルギーを得れば、引力原子に變化し。逆に、引力原子 \parallel 燃熱子が、其廻轉又は旋回運動エネルギーを滅亡すれば、エーテル原子に還元するものとす。

故に、靈質交合性原理 \parallel 無有哲學は、エーテル一元論、即ち、靈子一元論なりと謂ふべし。

二 熱子の概念

宇宙には無数の天體あり、エーテルは宇宙に瀰漫す、と云ふ。故に、宇宙はエーテルと天體とより成る——と理屈するを得べし。

天體とは地球、太陽、月を首じめ、遊星、衛星、恒星、星雲……等を謂ふ。

現代科學は、太陽は熱源體又は光源體なりと謂ふ。亦、地球内部は高溫度を有するものなりとも謂ふ——月のみは稍々例外視さるゝが如しとは雖——要するに、天體は熱源體なりと云ふべし。熱氣學にては、熱源體たる各天體の主たる構成、組織、原子を燃熱子と云ふ。

又科學は、各天體は相互に牽引す、即ち引力を有すと謂ふ。故に各天體を引力源體と觀ることも得べく、従つて、燃熱子 \parallel 天體引力原子なり——と云ふと同意義なりと承知すべきなり。

三 熱氣學と電子論 熱子と化學元素

電子(Electron)は、エーテル原子 \parallel 冷熱子 \parallel —^Hに、

陽核 (Positive nucleus) は、引力原子 \parallel 燃熱子 \parallel ^Hに、

該當或は近似するもの、如し。故に電子論に通曉する科學者は、熱氣學を了解するに便利なるべし。然れども電子論に、あまりに拘泥すれば却て甚しく障害あらんか。

現代化學の元素のうち、

水素——窒素——は、エーテル原子 \parallel 冷熱子、炭素——酸素——は、引力原子 \parallel 燃熱子を——主體とする熱氣物即ち、陰・陽・熱子により合成される物質或は元素なるやに思はる。他の八十有餘の元素も亦、右に準じて分類することを得べきも、此書にはさまで必要もなく、亦、將來或は後世の研究に俟つべき點も多々あること故、茲には省略する次第なり。(熱氣物。凡べての物體、物質は H と、 H とが、同性は牽引し、異性は反撥又は交合・交接・即ち熱氣作用により、組織、形成、合成、されるものとす。故に全、物體或は物質を單に熱氣物と云ふ場合あり。)

四 陰・陽熱子は、同性は相互に牽引す

月が地球に、太陽が地球、月、等に引力を及ぼすと謂ふ。これ、 H \parallel 引力原子 \parallel 燃熱子の大量體たる各天體が、相互に同性牽引する所以なり。(然れども是は、只單に説明の便宜上茲に引例記述したりと雖、事實は後章にて説述するが如く、引力 \parallel 光波即ち光波 \parallel 引力波にすぎざるもの、如し。)

又、地球上の物體又は物質の重量或は重力作用は、夫れに含有又は、夫れを合成する H \parallel 燃熱子が、地球引力原子の本源體たる地球引力に、同性牽引される爲なり。然して現代科學は斯れを單に「地球の引力作用に據る」と謂ふにすぎざるなり。

燃熱子を多量に含有する鐵及び金屬類が、地球引力に、同性牽引される力は甚大にして、吾人は夫れ等を重量物と謂ふ。

五 陰・陽熱子は、異性は反撥又は交合・交接・結合、する熱氣作用を惹起するものなり

$-H$ || エーテル原子 || 冷熱子が、 $+H$ || 引力原子 || 燃熱子に、接近又は遭遇すれば、直ちに交合、交接せんとする強烈なる性状を有す。此實行現象を熱氣作用と云ふ。

六 熱氣作用

- 一、天體の蒼生、同自轉及び公轉、同光波（|| 光線又は引力作用）
- 二、現代科學に於ける電子、原子、分子、元素、等の化學的親和力或は分子凝集力、
- 三、電磁氣作用或は現象、電、電、極光、流星、

- 四、光線・熱線に於ける輻射作用
 - 五、潮汐に於ける太陽及び月の引力作用、
 - 六、熱・燃燒・光熱・爆發作用、
 - 七、物體・物質・等の組織・形成・合成、
 - 八、光・音・色・影像・香・味、
 - 九、人類及び動植物の交接、受胎、繁殖、成生、榮養或はカロリー、呼吸、等、
 - 十、幽靈及び人魂現象、
- 等々は、凡べて熱氣作用の一部なりとす。

七 $-H$ || エーテル原子 || 冷熱子 || 陰熱子

宇宙は寒冷にして靜寂なり。

エーテル原子も靜寂性を有し、現代科學が想像し得べき最大寒冷度の原子にして、

亦、大なる浮揚性を有するものとす。又陰性なり。

透明・無色・輕快・寒冷

等の物質は、割合上、 $-H$ エーテル原子を多分に含有するものと概念すべし。

(吾人は「地球引力の場」内に棲息するもの故、此エーテル原子の浮揚性を考慮せざるべからざるなり。然れども、地球を首じめ各天體特有の「引力の場」以外の宇宙にては、此浮揚性に就いて、さまで拘泥するの要なからん。)

エーテル原子は彈性あるものなり。

(靜寂性は、靜寂せしむる爲の強烈なる行動或は習性ともなるものなり。 $-H$ が旋廻運動エネルギーを得れば、 $+H$ に變化す。此旋廻運動エネルギーを征服して、本來の $-H$ に還元せしむる意志、力、となるべきことにも注意せざるべからざるなり。)

八

$+H$ || 引力原子 || 燃熱子 || 陽熱子

現代科學が想像し得べき最大暑熱度の原子にして、廻轉又は旋回運動性、活動性、燃焼 || 灼熱 || 光熱性、牽引生(引力性)、下降性(重量性)……等を有するものとす。又陽性なり。

不透明、有色、重力(重量性)、溫暑、燃焼性、

等の物質は、割合上、 $+H$ || 引力原子 || 燃熱子を、多分に含有するものと概念すべし。

(特別に注意を要するは、前記の陰、陽熱子は前述せる如き性質、性状、習性、を有するとは雖、單獨にては、夫れを發輝すること不可能なるものなりと云ふことなり、例へば $-H$ || エーテル原子は若干の $+H$ || 燃熱子なしには、寒冷現象を惹起する能はず、又反對に、 $+H$ || 燃熱子も異性たる $-H$ || エーテル原子皆無なる場合は、絶対に溫暖、活動、重量性等を現出する能はざるものなる點なり。)

九

$+H$ || 引力原子 || 燃熱子と地球 $+H$

大なる真空球内に於て、他の真空球を高速度に廻轉するとせば、内側の真空球に引力を發生するなるべし。此引力を⁺H⁺ || 引力原子と云ふ。故に、引力原子 || 燃熱子は、廻轉又は旋回運動エネルギーなり。此實驗に於て、内側なる真空球を、地球自轉速度と同一スピードにて、地球蒼生以來の無限大なる長時間に等しき廻轉を與ふるものと想像すれば、地球引力原子 || 地球燃熱子 || 地球⁺H⁺を得べし。同理により、太陽引力原子 || 太陽⁺H⁺、月引力原子 || 月⁺H⁺、等をも得べし。

然れども、熱氣學にて、天體を論ずるに當りては、地球⁺H⁺ || 地球引力原子を以て標準とすべきならんか。

(科學に於ては、如何なる程度の旋回運動エネルギーを以て⁺H⁺ || 燃熱子の標準とすべきかは、將來又は後世に於ける研究を俟つに非ざれば、明言すること至難なれども、杜撰なる現代科學にては、酸素中の燃熱子 || ⁺H⁺ (陽核) を以てすれば差支なからんかとも想はる。勿論、水素・炭素・窒素・等を合成する⁺H⁺ || 燃熱子も參考に供して、

最も正鵠を得たる、⁺H⁺ || 燃熱子の發見に精進せざるべからざるなり。⁻H⁻ || エーテル原子は、現代理學の如く水素中の電子を以て該當さすことにして差支なきやに想はる。)

第二章

一 摩擦 || 旋回運動 || 燃熱子製造

摩擦 || 方向運動 || 旋回運動 || 燃熱子製造なる所以は、緒論十二にて既に説述せしが、掌の下に、小銃の散彈の如き多數の微粒丸を置きて、其掌の方向運動を爲さば、其微粒丸の群れは忽ちにして旋回運動を惹起すべし。

又、夫れより尙一層微細なるもの即ち分子、原子、陽核、電子の如きものを、掌の下に置いて實驗することを想像すれば、右の所以或は事實は益々顯著にもなり亦釋然たるべし。加之、單に壓力を加へるだけにてさへ、

壓力或は壓縮|| 旋回運動|| 燃熱子製造、
の効果を招來する事實をも了解することを得ん。亦衝突、煮沸、打撃、等も、
熱子製造の手段、方法なりとす。 +.H || 燃

二 熱

物質を合成、組織する陰、陽熱子の増減により、其熱氣作用力|| 化學親和力或は分
子凝集力の平調、調和を亂される爲に起る現象を熱と云ふ。

(熱は物質なり——と宣言するには多少躊躇すれども、熱は陰、陽熱子の増減によ
つて起る現象なりと謂ふ故、從來の學說とは大いに相違する次第なり)
熱には左の二種あり。

暖 暑 熱

+.H || 燃熱子多分なる場合

-.H || エーテル原子少分なる場合

寒 冷 熱

-.H || エーテル原子多分なる場合

+.H || 燃熱子少分なる場合

溫 度 上 昇

+.H || 燃熱子増加する場合

-.H || エーテル原子減少する場合

溫 度 下 降

+.H || 燃熱子減少する場合

-.H || エーテル原子増加する場合

熱 の 發 生

摩擦又は壓力|| 旋回運動|| 燃熱子製造にて、摩擦の速度や壓力の高低に比例して、製

造、生産燃熱子量も漸次増加して熱の發生となり、聽て暖暑熱旺盛ともなるものなり。

地球引力の場

地球の空氣及び引力(眞空氣)の存在する限界を云ふ。地球引力の場は、地球自轉に際して、地球と共に廻轉するものにして、其場内に於ける空氣や物質の如く、眞空氣たる $-H$ エーテル原子及び $+H$ 燃熱子も亦、靜止状態にあるものなり。

各天體には個有の引力の場あるものなり。これ有るがためにこそ、各天體の光り即ちエーテル光波を起こすものなり

$-H$ エーテル原子と $+H$ 燃熱子との割合

地球中心近傍に於ては $+H$ 燃熱子のみにて、エーテル原子皆無、

地球表面附近に於ては、燃熱子21%、エーテル原子78%(但し斯れば、空氣の酸素

と窒素の割合を借用したるなり。將來化學が進歩するにつれ、多少變更を要する時期到來するやも知れざれど、夫れまでは此兩原子 \parallel 熱子の割合や分布、散在状態は、夫れ等の變化物たる酸素や窒素の、夫れを以て推察して差支なかるべし。)

地球引力の場外に到れば $-H$ エーテル原子のみ存在して、 $+H$ 燃熱子絶無なりとす。

(故に、只其一方しか存在せざる地球内部及び地球引力の場外の宇宙とは、溫度即ち熱は絶無なる理なり。熱は $-H$ と $+H$ との陰、陽熱子の交合作用即ち熱氣作用なるも、右の場所にては交合すべき相手たる異性熱子なければなり。)

熱氣作用と暖暑熱發生は

(一) $+H$ 燃熱子は多分、多量なるだけ

(二) $-H$ エーテル原子は少分、少量なるだけ、——旺盛なるものなり。

故に、地表より地中に到るに従つて溫度上昇すべし。然れども、 $-H$ エーテル原子

皆無なる地球中心近傍にては——酸素瓶の内部の如く——熱氣作用即ち熱の發生 \parallel 溫度絶無なるべき理なりとす

第三章

一 電氣の正體

が、旋回運動エネルギーの蓄積、又は蓄積によりて起こる現象にして、 H \parallel 引力原子 \parallel 燃熱子に該當するものなることは既に緒論第十二にて記述せり。

摩擦 \parallel 旋回運動 \parallel 燃熱子製造に於て、

熱は、主として摩擦の壓力、

電氣は、主として摩擦の速力、

に因るものなりと考察するを得ん。然れども實際問題としては、其區別を判然たらし

むること至難なるものにして、從來の電氣學說や電子論が學界にノサバリ風靡して今日に到りたるも是非なき次第なりと謂ふべし。

尙、電氣の正體を研究する爲に、物理學實驗に常用されると謂はれるウイムザーストの起電機に就いて左に検討せん。

一 硝子板(又はエポナイト)に錫箔を貼るは——夫れらは不良導體なるを以て、錫箔片に感録した旋回運動エネルギー(所謂電氣)の傳導・散逸を防止する爲なり。

二 其錫箔片を離して即ち距離を置きて貼らざるべからざるは——磁束或は磁力線を切る爲なり。若し此錫箔を帶狀に連續して貼らば、磁力線を切る能はざる故、旋回運動エネルギー發生するとも、それを蓄積する能はざるなり。故に結果的に觀れば電氣發生せざると同一なり。

三 右の場合、磁束或ひは磁力線を截れば、何故電氣發生するや?——硝子板が廻轉すれば、夫れに貼りつけられたる各々の錫箔片は、金屬の刷毛にて摩擦されて、摩

擦 \parallel 廻轉運動エネルギーを發生・保持するも、各錫箔片が距離あるため、遂に此エネルギーは**飛ばんとする性狀**を惹起するに到る。然して此エネルギーが、更に金屬の櫛近く接近すれば、**櫛に飛びつき**、即ち掻き集められて、極に蓄積されて、遂に所謂帶電狀態となるものなり。

故に電氣とは、摩擦 \parallel 方向運動 \parallel 廻轉又は旋回運動エネルギーの蓄積又は蓄積によりて起る現象にして、^H燃熱子に該當するものなりと余は謂ふ次第なり。

四 前後二枚の硝子板が、反對即ち逆方向に廻轉せざるべからざるは——若し只一枚ならば、極に蓄積さるゝものは只の半旋回運動エネルギーにすぎざる爲不都合なるものゝ如し。然れども、前後の硝子板が反對に廻轉すれば、各々の半旋回運動エネルギーが相互に合作して、完全なる旋回運動エネルギーとなるを以て極に蓄積さるゝものならんか。

五 刷毛を弓狀金屬棒端に有らしめ、亦其他の装置は、要するに、廻轉運動エネル

ギーを蓄積する爲の單なる方法又は装置に過ぎざるなり。

六 此機の+、-は、極の電位の差によるものなり。(以上)

「感應電流——コイルの導線の兩端を、鋭敏なる電流計に連結して置き、コイルの中に急に棒磁石を入れると、電流計の指針は一方に傾き又急に棒磁石を引き出すと指針は反對の方向に傾いて、棒磁石の動く度毎に瞬時の電流がコイル内に生ずることを示す。理學書」

此場合電流の強さは、棒磁石の入れ、又は出す、爲の方向運動の速力に比例するなるべし。然して、此棒磁石の磁力線は、コイルによつて截られて飛ぶ性狀を惹起して、コイルに飛びつき、所謂電流作用を惹起するものなり。故に此場合、棒磁石とコイルは、方向運動エネルギーを蓄積する方法或は能力なり——と考ふるを得べし。

硝子と絹布、或は封蠟と毛布の、摩擦 \parallel 方向運動によりて電氣を發生すると云ふことは、夫れ等の各二物體間の特異性による摩擦 \parallel 方向運動によりて發生するエネルギー

「電氣なり——」と思惟するよりも、寧ろ、夫れ等の物質間には、摩擦(∥方向運動) エネルギ―を貯蓄する性状、能力、特異性あり——と考ふることの方が合理的或は科學的なるべし。

工業又は電燈用等のダイナモは、發電子を廻轉させて場磁石(界磁電流)の磁束又は磁力線を截り、更に又、感應による發電子鐵心の捲線に發生する磁束或は磁力線をも截らして(即ち發電子の廻轉は、場磁子の磁束を截ると共に、反對に發電子鐵心の捲線に感應發生せる磁束を截らす、兩作用あるものなり)電氣又は電流の尤なる性状たる飛びつく性質を惹起せしめ、夫れをブラツシユに飛びつかせ、即ち掻き集めて蓄積、又は電流として直接仕事をなさしむる爲め等の装置を有する機械なり。換言すれば、ダイナモは、發電子の廻轉運動エネルギーを蓄積又は、直接仕事に使役する爲の機械にして、電氣又は電流は^H燃熱子に該當するものにして、ダイナモは^H燃熱子の製造或は生産機械なりと謂ふべし。

一 エネルギ―

「エネルギーの變換。エネルギー不滅の原則に依て、エネルギーは如何に形を變へるとも、其總量には毛頭増減がない。換言すると、エネルギーとは絶対に創造することの出来ぬものである。随つて前述の機械的勢力は、石炭なり、水なりの有するエネルギーが、是に變つた迄のことで、創造されたのでは決してない。然らば原動機とは畢竟之等エネルギーの變換装置にすぎないことが判る。發電機も同様で、一方原動機に依つて廻され、他へ電力を供給する機械だから、之亦電子の創造ではなくして、原動機よりの機械的エネルギーを電氣的エネルギーに變へてやつたにすぎない。但しエネルギー授受の過程には諸種の損失を伴ふものだから、最初水なり石炭なりの有するエネルギーが、最後に電氣的エネルギーとなるまでには、かなりのエネルギー損失があることは免れぬ數である。物理學書」

然れども、熱氣學にては旋回運動エネルギー即ち^H燃熱子を以て、現代理學に云ふ諸種エネルギーの根源とするものなり。故に從來の學說とは根本的相違ある次第なり。我原理によれば、發電機は燃熱子即ち旋回運動エネルギーを發生又は創造する機械にして、所謂電氣又は電流のエネルギーは、發電子の廻轉エネルギーを以て計算可能なれども、現學說の如く、單なるエネルギーの變換にすぎずと造作なく片付くるを忌むなり。

^H燃熱子^H旋回運動エネルギーは、地球の自轉によりて瞬時も休憩なく創造されるものなれども、夫れ等の或ものは絶えず地球引力の場外に吐き出されて^Hエーテル原子に還元し、或者は地球内部に蓄積されて噴火や地震の原因を蘊釀するものなれども、現在の吾人は夫れ等を知るによしなく、自然に調節されるものにて、現代科學の如き大雜把的見解を以てすれば「エネルギー不滅」の原則を假設するとも實用上には差支なからんも、科學的理論上からは排斥すべきは當然なりとす。(ダイナモの旋回

エネルギーの蓄積たる電氣も、末には其旋回エネルギーを滅亡して本來の空即ち^Hエーテル原子に還元するものなり。)

三 電氣の陰陽性

電氣の陰陽性には左の二種あるものゝ如し。

- 一、電流の方向によるもの。
- 二、電位の差によるもの。

例。

左の磁氣棒の磁氣は、N端よりS端に流れているものと觀て差支なからん。(矢は磁氣の流れる方向を表示するものとす)



此磁氣棒を三つに切斷すれば左の如くならん。



然して、是を接近すれば、元の如く相互に接合すべし。現代物理学は是を「異性は相互に牽引するものなる故くつつく」と云ふも、磁氣の流れの方向より觀れば「同流は相互に牽引す」る結果になりて、熱氣學の定義と一致するなるべし。

右の棒の、中央だけの分を、逆に左の如く置き換へたりとせんか。



の如くなるを以て物理学は「同性は反撥するものなる故に此棒は接合せない」と云ふ。

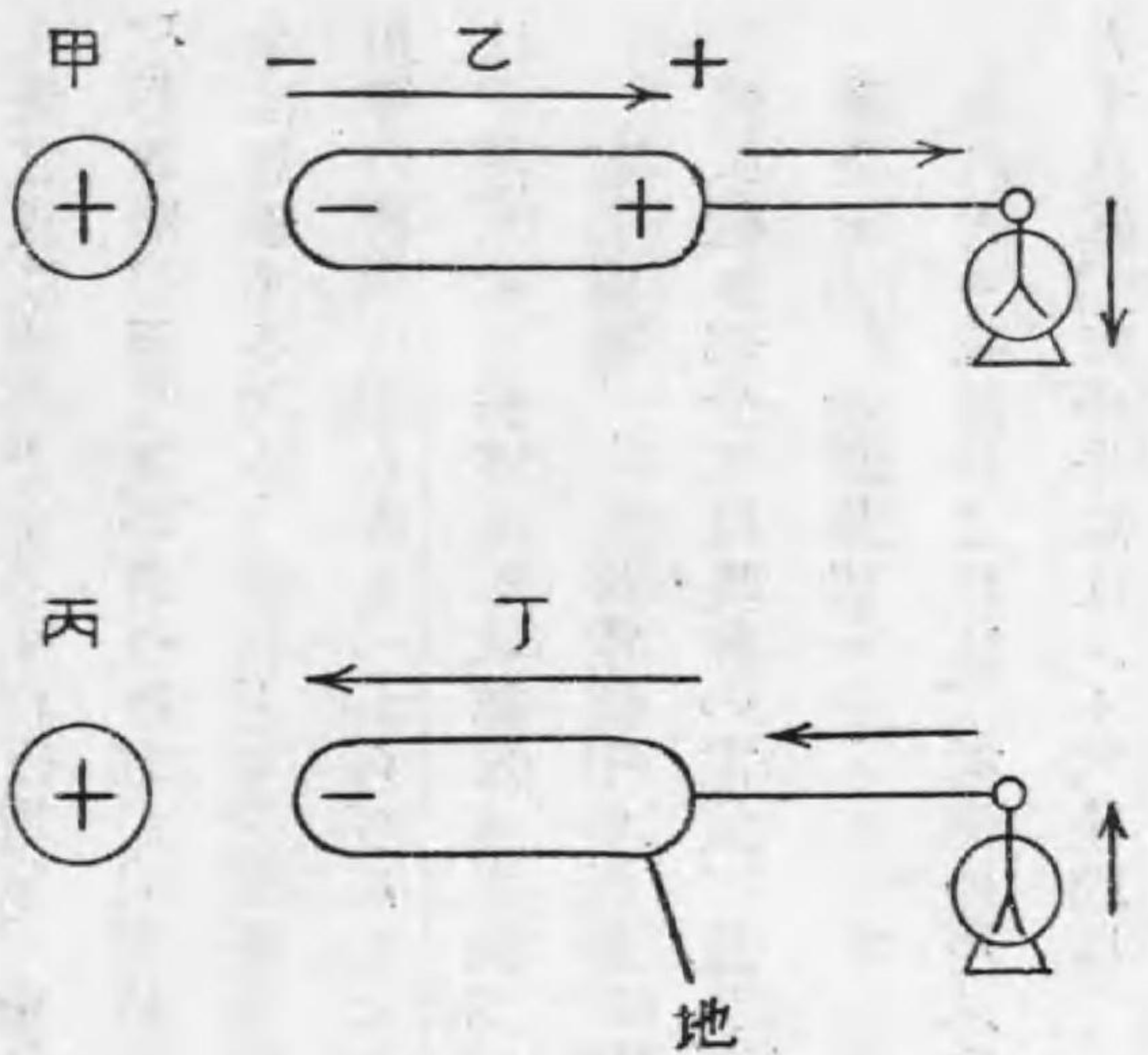
然れども、磁氣の流れの方向より觀れば「異流は反撥す」る結果と同一なることに

注意すべきなり。

便宜或は便利上よりすれば電氣、磁氣の陰陽性を、如何に名づけるも勿論勝手たるべしと雖、現今流の名づけ方が、電磁氣の本質を研究する爲には甚だ障害したるやに余は思惟するなり。然れども、電磁氣の正體をさへ極め得ずして、只其應用理論や實用等の研究に趨らざるべからざることを餘儀なくせしめられたる現代物理学としては、萬止むを得ざりし次第なりと云ふべし。

「電氣感應。——帶電體甲の近傍に絶縁したる導體乙を持來すときは、導體の帶電體に近き部分には異種の電氣、遠き部分には同種の電氣を生ず、此現象を電氣の感應と云ふ。物理学書」

然れども我説によれば、電流の甲（左圖上）より乙の方向に流れているものを（+）とすれば、矢の先端は（+）、後端は（-）にして、結果に於ては同一となるが如きも理論又は概念上には著しく相違する次第なりと云ふべし。



「上圖(下)の如く導體丁を一時地球に連絡し、次に連絡を絶ちて丙を遠ざくるときは、丁は陰電氣を帶ぶ。理學書」
然れども我説によれば、右の如くすることによつて、電流の方向は全然逆流する結果を招來して、矢の如く反對に流れる爲に斯くの如くなるものとす。

金箔驗電器に、上圖の如き流の方向の電氣を通ずれば金箔は開くべし。これ余の所謂旋回運動エネルギーの蓄積たる電氣が、二個の金箔を——各自の有する相反する即ち脊なか合せの灣曲の慣性に其まゝ作用し

て——各自に旋回せんとする爲なり。

右下圖の矢の如き流れの方向の電流ならば、前の逆に、即ち二個の金箔は稍々閉ぢる傾向となるべき理なり。

「電氣を生ぜる物體が輕き物體を吸引せる後、之を強く斥くるは、吸引せられたる輕き物體は、電氣を生ぜる物體より、同種の電氣を得たるを以てなり——理學書」
我原理によれば「輕き物體は凡て、割合上、 $-H$ || エーテル原子を多分に含有するものとす」と云ふ。帶電體が、夫れ等の輕き物體を吸引、感應すれば——電氣は $+H$ || 熱子なるを以て——輕き物體の陰、陽熱子は其化合力 || 原子親和力を亂されて、各熱子は恰も目醒める状態になりて活動を開始するも、元來此輕き物體中には割合上 $-H$ || エーテル原子が多分にあるため、帶電體の電氣即ち $+H$ || 燃熱子と「異性反撥」して、應て互に強く相斥けらるるに到るものなり。

軟鐵の如き「割合上 $+H$ || 燃熱子を多分に含有する」ものは右の場合、帶電體の電氣

たる^H 燃熱子と「同性牽引」するを以て此兩者は互に強く結合するものなり。

又更に、此項を説明する便利の爲、物理學書より拔萃して参考に資せん。

「感應によつて生ずる電氣は、同名のものが遠い部分へ、異名のものが近い部分へ生じ、其量は相等しい」

「兩電流同方向に通ずれば互に相引き、兩電流反方面に通づれば互に相斥く、又直線狀の導線も圓形の半徑の非常に大なる場合と見做せば、二本の平行せる導線に同方向に電流通ずるときは互に相引き、反方向に電流通ずるときは互に相斥く。」

「第一、電氣には二種ある。即ち絹ハンケチで、硝子棒を摩擦した時に生じたものと、封蠟を摩擦して生じたものとは異なる」と云ふ事である。第二、同じ種類の電氣は反撥し合ふけれども、異なる種類の電氣は互ひに吸引すると云ふことである。第三、一つの物質には摩擦のために常に同じ種類の電氣が出来るとは限らない、例へば、硝子には何時でも同じ電氣は出来ない。即ち摩擦するものによつて異

なつた種類の電氣が生ずると云ふ事である。此硝子と絹ハンケチとの摩擦の時に硝子に生じた電氣を陽電氣と云ひ、硝子とフランネル、封蠟と絹ハンケチの場合に硝子や封蠟に生じた電氣を陰電氣と云ふ。——凡て摩擦で電氣が生ずる場合には必ず、兩種の電氣が其兩方に一種づゝ發生する。然かも其發生した陰電氣の量と陽電氣の量とは必ず相等しいものである事は色々の實驗で證明することが出来る。」

説明方法は尙不完全・不充分ならんも、要するに、水が水を、油が油を、同性牽引するが如く、異性が牽引するものと現代理學に説かれてゐる電氣が、其實は電位の高きものが低きものに「同性牽引」するものなることを訓示或は暗示を多少たりとも與ふることを得れば余の本懐なり。

雷電は、陽電氣を帯びたる雲が、陰電氣を帯びたる雲に接近して、異性牽引により、起る現象なりと現代理學は教ふるも、其實は、多分に^H 燃熱子を帯べる、電位の差ある二種の雲が、同性牽引する爲なり。

(水・油・電氣、等が高きより低きに、或は濃きより薄きに、流れ或は牽かるゝは、宇宙即ちエーテルの静寂性あるためなり。斯はあまりにも抽象的なる言なるも、其妙味を會得する人もあらんか。

(現代高等理學は、電氣の正體をさへ極めずして、然も、電子論の如き不完全なる學說を以て、萬象を究理せんとするを以て無茶苦茶なりと云ふを得んか。)

四 引 力

廻轉運動隋性を引力と云ふ。

水を入れたる盥に手を差し入れ、旋回運動を爲さば、手の周圍及び後方の水も亦追隨して、共に旋回運動をなすべし。是れ旋回する水が、周圍や後方の水を呼び、即ち引力を發生して、共に旋回運動を爲すものなりと考ふるを得べし。故に余は「引力とは旋回運動隋性を云ふ」と定義せんとする所以なり。

地球の自轉、即ち旋回運動が地球引力を發生するが如く、發電子の旋回運動エネルギーの蓄積たる電氣・電流・磁氣、も亦引力を發生すべき道理なり。

引力は、旋回運動エネルギーの性状の一種(或は副産物)にして従つて電氣・電流・磁氣の性状の一部なりと觀ることを得べし。

地球が自轉即ち旋回すれば、地球上の物質を組織・合成する^H燃熱子も亦、地球自轉に追隨して、同一旋回運動を爲す性状を有するものにして、是を地球引力作用と謂ふ。

又、引力は^H燃熱子の、同性が同性に追隨するエネルギーなりと觀ることも得ん。

此項を玩味する程の學者ならば、余の所謂「地球引力の場」の合理的にして、又、地球引力の場は、前記の盥の水の如き理なることも合點可能なるべし。實に、引力と燃熱子は不可分のものにして、引力 \parallel 燃熱子なり、と觀ることも得ん。

故に、地球引力は、地球表面や廻轉軸 \parallel 地軸に對して、垂直或は直角に作用するものにあらざるが如き理なれども——地球自轉運動エネルギーたる $+\text{H}$ \parallel 燃熱子に $-\text{H}$ \parallel エーテル原子が熱氣作用を惹起して、地球を高速度に旋回すると共に、空氣や凡べての物體が地球の廻轉に遅れざるやう同一速力で廻轉する（ \parallel 吾人に恰も空氣や萬物が静止状態にある如く感覺さす爲めの）如き神祕作用ある爲なり。

五 酸素や窒素

酸素や窒素は、此妙法たる地球自轉の爲の熱氣作用によりて發生するものなり。換言すれば、地球を高速自轉さす爲の熱氣作用 \parallel 作業に於ける、

酸素は地球 $+\text{H}$ \parallel 燃熱子の——窒素は $-\text{H}$ \parallel エーテル原子の、

糟粕或は仕事屑なり。

屢々説述せる如く、各天體には個有の引力の場及び大氣存在すべき理由も今や釋然

せん。（太陽は地球に比し、質量・自轉速度・太陽引力の場、等凡べて甚大にして、亦其大氣の酸素の比率も、酸素自體のエネルギーも大ならざるべからざるなり。）

六 電 燈

電球に使用されるタングステンは金屬なるを以て $+\text{H}$ \parallel 燃熱子を割合上多分に含有する（小比率なる $-\text{H}$ \parallel エーテル原子とによつて合成される）物なり。

是れに電流を通じたりとせんか、電流は人工 $+\text{H}$ \parallel 燃熱子群なるを以て、タングステン中多分なる $+\text{H}$ \parallel 燃熱子と牽引結合して其量を急大増加して、茲に白熱なる電燈現象となるものなり。

然してタングステン中の $-\text{H}$ \parallel エーテル原子は、電流燃熱子の爲め、異性反撥して漸次排撃される結果を招來す、是れ電燈の壽命の限定される所以なり。

右の場合、電流又は抵抗の何れか或は何れも、強きときは、電流の燃熱子はタング

ステン外に氾濫・發散して、電磁波 \parallel 燃熱子波動として擴布し、周圍なる空中燃熱子(酸素等)と共に熱氣作用を惹起して、所謂電燈として光熱するものなり。

(街道の電柱に點燈されたる僅か八燭光の電球と雖、遠くより眺むれば、距離が遠くなればなる程却つて、恰も御光のさすが如く光輝するは何故ぞ? 是れ電球と眼の中間に散在する空中の燃熱子 \parallel 酸素の量が多くなりて、従つて燃熱子波動なる電燈光波と合作して熱氣作用旺盛なるためなり。)

七 太陽光線・星光

緒論十に、太陽光波・月光波・星光波、等は $-H$ \parallel エーテル原子波動、電磁波等は $+H$ \parallel 燃熱子波動なり、と記載せしが、空中の $+H$ \parallel 燃熱子(主として酸素)に光熱即ち熱氣作用せしむる爲めの波動としては後者は甚だ有利、有效にして、其エネルギーも僅少にて事足れりと雖、エーテル原子波動は太陽光波の如く莫大なるエネルギーを要する

ものなり。然れどもエーテル原子波の滲透性は却て反對に偉大なるべきものなり。

第四章 地球引力

物質の重量は地球引力作用なり。即ち物質中の $+H$ \parallel 燃熱子が、地球 $+H$ の本源體なる地球に、同性牽引される作用なり。

地球引力の本源は、地球自轉軸の方向に集中せざるべからざるものなり。

圓盤を廻轉すれば、求心運動エネルギーは、圓盤の中心に集まるべし。

球體を轉動すれば、其求心運動エネルギーは、球體の中心に集まるべし。

然れども、球體を一定方向に廻轉すれば、求心廻轉運動エネルギーは、廻轉方向と直角なる球の廻轉軸に集まるべし。即ち獨樂を廻せば、求心廻轉運動エネルギーは、獨樂の芯に集まるが如し。

同理にて、地球引力即ち地球^Hの本源は、地球の中心にあらずして、中心を過ぐる地球自轉軸の方向 \parallel 南北線の方向に有らざるべからざるなり。即ち其顯れが地磁氣の南北兩磁氣極なりとす。又、フレミングの三指法によりて地球を按ずるに、拇指を地球表面上に於て西より東の方向に、食指を夫れに直角に置けば、食指は地球の中心を指し、更に夫れ等の面に直角に中指を置けば、中指は南北の方向を指すべし。由是觀之、地球を一の廻轉磁氣體と觀るときは、電流の方向 \parallel 地球引力の本源は、余の説の如く、地球自轉軸の方向に集中されるものならざるべからざるなり。

故に重力作用又は物質の重量は、地球自轉軸に直角に作用せざるべからざるものとす。從來の學説の如く、地球引力の本源を地球中心となし、物質の重量又は重力を、夫れに作用すると謂ふ説を、余は排斥するものなり。亦現學説は、地球は南北に多少偏平なるものとし、重力の強さは緯度によりて其値（即ち ρ の）を異にする、と云ふも、偏平説については如何なる根據や計算方法等に據りしか、夫れを検討する餘暇も

興味も有せざる余なれども、南極探險さへ完成し得ざる現代に、實測によるものには斷然あらずして、此問題も將來又は後世の研究を俟つべき重要事の一なりとす。なるが故に、現代科學や常識が、余の此説を承服すること困難なるは是非もなし。然して高緯度 \parallel 極地方に於ては、物體は極端に傾きて安置するさへ不可能ならんと、余を詰問する人あるも、地殼は多量の^H \parallel 燃熱子より組織さるゝを以て、亦地球内部も^H \parallel 燃熱子鬱積するものにして（地殼は比較的厚大ならざるべし）、斯かることは杞憂にすぎざるべし。然れども磁杆の如く、地球引力や地磁氣に感應度至極鋭敏なるものが傾斜するは勿論なり。

前述せし如く、物質の重量は、極地方に多少重く、赤道地方にて多少輕き理なり。然れども、地球上に遊動散在する空氣や海水の如きものは反對に、遠心力作用に似たる支配を受くるを以て、

空氣、極地方のものは氣壓小にして、熱帶地方のものは氣壓大ならん。

海水、極地方のものは密度小にして、熱帯地方のものは密度大ならん。換言すれば、空氣や海水は、熱帯地方のものは燃熱子の含有量、比較的多分なるものなり。

地球燃熱子も亦右の如く、遠心力作用に據りて即ち地球自轉軸に直角に發散、擴布するものにして、

熱帯が密度大にして、寒帯は密度小なり、

低所が同上、高所も同上。

是れ、寒冷なる太陽エーテル光波が、地球引力の場に達し、

赤道地方にては、^H燃熱子多分なるを以て熱氣作用旺盛にして熱帯を

極地方にては、燃熱子の存在稍々少分なるを以て熱氣作用も不充分にて寒帯を

現出する所以なり。亦熱帯にても、ヒマラヤの如き高峰、高所は、空中燃熱子量多分ならざるを以て寒冷なる所以なり。

赤道地方に發生する黒潮は、多分の燃熱子を含むるを以て熱氣作用旺盛にして、流れる地方の溫度を上昇せしめ亦、生物の發育等にも影響する點多々あるものなり。

第五章 天體の創生と人類の誕生

地球内部に充滿する^H地球燃熱子が、地球自轉の爲め益々其旋回エネルギーを増加し、遂に噴火口から一時に多量に大爆發したりとせんか、其大部分は超大スピードにて空氣を突發し、更に地球引力の場も通過して、果ては寒冷、靜寂なる宇宙に達すべし。

地球内部にありて億兆年間に亘りて得た旋回運動エネルギーたる此集團を取り巻く周圍の、宇宙エーテル原子は、此不意なる宇宙の亂入者を取靜める爲に——即ち熱氣作用を惹起する爲に——直ちに近づくも、此亂暴者の集團の爲め卷添へを喰つて、夫

れ等のエーテル原子も漸次旋回運動エネルギーを得て⁺燃熱子に變化される結果を招來するを以て、此^Hの集團は、近づき來る周囲の^Hを征服しつゝ其質量を漸次増加して太り行くものにして、是れ所謂星雲なりとす。

此星雲は、母體が太るに従つて旋回運動速度を漸次に減じて——恰もエーテルの抵抗に、遂に降參する状態になつて——遂には廻轉遅々たるに到らん。仍て、其周囲を取捲く^H——エーテル原子群は次第に熱氣作用を惹起して此星雲の周囲を氷雪を以て凝結して、此星雲が纏て天體に進歩するの第一歩を演ぜん。是を天體の蒼生又は氷雪時代或は冬眠時代と謂ひ、此頃天體の地殻は蒼生さるゝ筈なり。亦、嘗ては地球も、月も、太陽を首じめ凡べての天體も此時代ありし理なりとす。

さて、此星雲が、冬眠時代に地殻を生ずることにより、此星雲内部の燃熱子は地殻の發生によりて發散又は擴布されるのを著しく妨害されるを以て、此星雲は恰も眠りより醒めたるものゝ如く、旋回運動エネルギーを再び取戻し或は活潑ならしめて漸次

活動するに到らん。是星雲或は新生天體の覺醒時代又は氷河時代ならんか。

然して、此新天體の周囲のエーテルは、最初の(星雲發生當時の如く)捲き込まれる代りに、今度は其天體内部及び表面中の燃熱子と旺盛なる熱氣作用を惹起して此新天體を廻轉することに活動又は作用するものなり。故に夫れ等は相互に因果關係を蘊釀して、即ち熱氣作用によりて此新天體が益々廻轉すれば、天體内の燃熱子は其旋回運動エネルギー及び燃熱子數量をも増大し、増大することによりて、エーテル原子との熱氣作用は愈々旺盛になりて天體の廻轉運動は隆昌なるべき理なり。

斯くして此天體が活動期に入れば、天體内の燃熱子量、及びエネルギーは過大になりて(恰も高壓鍋の沸騰する状態になつて)遂に安全辨たる作用として、山又は山脈を形成すると共に、周期的に噴火或は地震現象をも惹起する所以なり。是れ現在の地球・月・太陽を首じめ凡べての天體即ち遊星や恒星なりとす。

以上は説明方法甚だ不充分、不完全なるため了解至難ならんことを懼ると雖、從來

の星雲説に近似するが如きも、心ある人は、大なる差異あるべきことに當然氣附かるゝならん。

此我説によれば、地球・太陽・月、及び全天體は、現代科學の謂ふが如き衰頽期にあらずして、太陽及び全天體は地殻あるために——時々各天體の燃熱子は沸騰状態を惹起するを以て、其安全辨たる噴火・地震、等の活躍は絶対に避くこと不可能なるは勿論なれども、——永遠に活動期にありて、異常なる突發事件が宇宙に惹起せざるかぎり、現状維持たるべしと余は思ふ次第なり。

將來又は後世に於て、天體熱氣學が進歩・發達し、地球燃熱子の研究が進み、其質量或は、エネルギーを計算可能なる時代には、古來の大地震・大噴火、等の歴史即ち週期や状態をも參考する等して、亦地震學・噴火學・地質學・氣象學、等の完成と相俟て、災害を未前に、的確に、豫知するを得て人類及び文化に貢獻するところ偉大ならんか。

例せば現今、晴雨計を以て氣壓を、寒暖計や濕度計を以て溫度や濕度、等を觀測することによりて天氣や低氣壓などを豫知可能なる如く、特殊の機具を發明して、常に地球燃熱子の状態を觀測すること可能ならば、地震や噴火等を豫知するに大なる貢獻をするに到らんか。(余の臆測を以てすれば、現今の地震計の如きは既發の地震の研究には役立つならんも、地震豫測器としての效果あるや否や疑問とするところなり。)

後章無有哲學にて説明する如く、卵子は燃熱子78%とエーテル原子21%、精糸は逆に $-H$ エーテル原子78%と $+H$ 燃熱子21%とより成るものとす。故に卵子は燃熱子を主體とする冬眠時代の星雲に相似す。其星雲が表面凍結・地殻發生、等によりて覺醒して、旋回運動漸次顯著となりて次第に活動期に入りて遂に天體を創生するが如く、卵子はエーテル原子多分にある精糸を得て熱氣作用を惹起し、受胎となり活動期に入りて、妊娠・分娩、遂に人類を誕生するものなり。故に天體創生も、人類誕生も、原理に於ては相似する次第なりと云ふべし。

星雲が、地球引力の場内に入り来れば、かの流星現象を起こして隕石を發生す。熱氣學を承認出來ざる人と雖、宇宙の寒冷なるべきことは承服するなるべく、然して、寒冷なるべき宇宙に、小なる星雲が灼熱物たる隕石を抱擁するものなりとは想像せざるべし。

我説を了解可能なる學者ならば——燃熱子を多分に含有する、電位の差ある雲が互に接近すれば同性牽引して、直ちに雷電現象と謂ふ熱氣作用を惹起するが如く、——燃熱子を多分に含有する筈の星雲が、地球引力の場内に入り来りて、彼の流星現象を惹起し、亦隕石を發生するからとて、さまで不思議とは思はざるべし。

硅砂は多分に燃熱子を含有するものなり。是を、高熱を以て溶解した上、多少の化學作業を加へて硝子を製造するものなり。硝子は冷めたく亦透明なるを以て、割合上多分にエーテル原子を含有するものにして、此工業こそは、⁺H₂O₂熱燃子多分なる物質を⁻H₂Oエーテル原子性に還元する、最も興味深き事實と謂ふべし。(亦製氷機に於て、

水をアンモニア使用によりて、氷に還元、變化さすも面白き次第なり。何んとならば、消化器官に於て、食物中の燃熱子の大部分は集められて血液に變化し、エーテル原子やエーテル原子の變化物たる窒素を主體とする消化機能液或は汁の大部分がアンモニアや糞便として排出されるものゝ如し、故にアンモニアはエーテル原子を多分に含有するものなればなり。)

萬一、月が他の天體に衝突するか等して破裂した場合を想像すれば、月の地殻は、最大冷寒度の宇宙エーテル原子の爲直ちに熱氣作用を惹起されて遂に溶解して、全部エーテル原子に還元し、残るは唯一の、月の内部に鬱積されたる月⁺H₂O₂引力原子⁺H₂O₂燃熱子の集團たる星雲のみとならん。然して此星雲は前記の如く、直ちに二世の月の創生に従事すべき理なりとす。實に⁻H₂O₂エーテル原子と、⁺H₂O₂燃熱子の陰・陽熱子の交合・交接たる神祕なる熱氣作用こそは萬物創生・創造の神なりと云ふべし。

第六章 潮汐・光波即ち引力

一 潮汐

海水は^H燃熱子を多量に有する、陰・陽熱子の熱氣物なり。

月（及び太陽）のエーテル光波が、地球引力の場内に侵入し来れば、燃熱子を多量に含有する海水は、異性たる^Hと熱氣作用を惹起する爲に發動して、恰もエーテル光波に牽引或は誘動される状態を呈するに到る。

女護が島に、男の群が近づきし場合の如く、

交尾期中の雌の群に、雄の群が近よりたる場合の如く、——陽性にて、活動的なる、彼女等は、天下の珍客たる男性の群に憧憬・牽引、されて、アラレモナク飛び出すものなり。

此現象を我等は月（及び太陽）の引力による潮汐と謂ふ。

此引力の能力・状態・程度、等を以て推察しても、從來やかましく高唱された。天體引力説・萬有引力論、等の如何に荒唐無稽の謬論にして採るに足らぬ説なるかを窺知するを得んか。

亦、余が、天體引力の場と云ふ破天荒の珍説を創案せし所以も首肯さるゝならんか。

後章にても説明する如く、月は地球に最近接するを以て、月エーテル光波は、無數に襲來する、寒冷なる星光波を追拂ふ役にも甚だ效驗あるものにして、満潮の頃は、月が其地の子午線近くにあり月光波を感覺する地方はエーテル原子量甚しく少分となるを以て、海水中多量にある燃熱子が其習性を發揮して躬ら燃えんとして遂にかの満潮となる——と考ふことも得るなり。

二 天體の光波は引力なり 引力即ち光波なり

引力を、單に引く力とのみ観るは甚しき認識不足なりと云ふべし。

相對せし二物體が、互に靜止状態にある時も亦引力作用中なりと謂ふを得ん、何んとならば(+)(-)の兩引力が平均している場合と考ふるを得べければなり。仍て相對したる二個の物體は、相對し \parallel 相照らし \parallel 互に反射し \parallel 相互に牽引中なり。換言すれば、引力とは反射作用を云ふ。ラジオ \parallel 電磁波(燃熱子波動)を以て、軍艦や飛行機を操縦可能なりと云はれる現代に於て、天體エーテル光波が即ち引力なり——と云ふとも、人はさまで驚かざるべし。天體は各自特有のエンナーシアを有し、勝手に自轉しつゝ——公轉たる拋物線を書きつゝ——相互に牽引(\parallel 引力) \parallel 反射 \parallel 相照しつゝ、永遠に宇宙に轉がり行きつゝあるものなり。然して異狀に脱線せざる限り、他の天體から

の特別引力干渉は絶對になき理なり。實に各天體は絶對的モンロー主義者なりと謂ふべし。

太陽と云ふ鏡と、地球と云ふ鏡とが、相對し、相照しつゝ、然も其間をエーテル光波及びエーテル熱氣光波と云ふ——伸縮自由自在なる——ゴム絲を以てつなぎ合はせ有るが如き状態は即ち、太陽と地球との引力關係に類似するものなり。故に天體の光線 \parallel 光波 \parallel 引力波或はエーテル光波 \parallel エーテル引力波なりと謂ふべし。實に宇宙には、無數の星光 \parallel エーテル星光波 \parallel エーテル星引力波錯綜するものなり。又地球を首じめ、凡べての天體は、伸縮自由自在なる無數のゴム絲にてつながれたる風船球の如し。

太陽光波は、 $+$ \parallel 燃熱子 \parallel 引力原子、なき宇宙にては純粹なるエーテル波動なれども、地球引力の場内に入り來れば、異性たる燃熱子と交合即ち熱氣作用して光線・熱線、となるもの故此場合はエーテル熱氣波と云はざるべからざるなり。

従來の學説は宇宙は真空なるものなりとしたれども、吾人の日常口にする真空は、地球引力の場内の真空 \parallel 地球上の真空にして、其真空中には H \parallel エーテル原子78%、 H \parallel 燃熱子 \parallel 引力原子21%あるべきことに注意せざるべからざるなり。故に宇宙も真空なりと謂ふ概念は改めざるべからざるなり。

第七章 地球

一 地球

地球は、地球 H \parallel 引力原子 \parallel 燃熱子の本源體にして、内部は燃熱子のみ充滿して H \parallel エーテル原子は皆無、地殻は燃熱子を主體とする兩熱子の熱氣物にして、亦地球燃熱子は更に進出或は喰み出して、空中は勿論、地球引力の場の限界まで存在するものなり。然して、地球引力の場を包圍する H \parallel エーテル原子は地球内部及び地殻中の H

\parallel 燃熱子に交合して熱氣作用を惹起して地球を自轉即ち廻轉せしむるものなり。且つ地球表面外即ち空中に發散する燃熱子にも熱氣作用をなすものなり。此熱氣物が空氣にして、空氣及び地球上の物體が靜止状態にあるも此熱氣作用あるためなり。故に空氣は地球を廻轉さす爲の熱氣作用による兩熱子の副産物又は仕事屑或はカスにして、太陽を首じめ光輝ある天體はすべて個有の空氣存在せざるべからざる理なりとす。

盥の水中にて、廻轉する圓盤の、周圍の水を靜止状態に置く爲には、手を以て圓盤の廻轉方向に、同一速さにて、周圍の水を押しつゝ旋回運動すればよき理なり。

地球を首じめ各天體は、靜止せるエーテル内に廻轉する球なり。其燃熱子が地表外即ち空中に溢れ出し、夫れにエーテル原子が熱氣作用を惹起して——右に説明したる手を以て圓盤の周圍の水を押し進めて靜止状態たらしむるが如く、——空氣と云ふ熱氣物を發生しつゝ、地表上の物體が靜止状態にある妙法・神祕を作業しつゝあるものなり。

故に空氣が靜止状態にあることは其實、地球廻轉と同一速力にて、相共に廻轉運動しつゝある即ち活動中なることの歴然たる證據なる所以なり。然れども、地球引力の場の限界附近、周圍のエーテルは、其爲却て甚しく攪伴・動亂する結果を招來するも、其エーテル波は地球には歸來することなくして、只宇宙に向つて擴布・傳播するものなり。是れ地球エーテル光波なりとす。亦是を以て觀るも地球も太陽や他の遊星・恒星の如く光源體なる所以は釋然たるべし。

此章を玩味する人は、太陽や恒星等は光源體と謂ひ得べきも、現代科學の謂ふが如き灼熱する熱源體にあらずして、太陽や恒星にも亦地球と同じく、地殻や山も有るべく、亦密度大なる個有の空氣即ち大氣存在すべき理なることにも想ひ到らんか。

昨年四月三日、石井三運余に問ふて曰く「地球自轉により動亂して起ると云ふエーテル波即ち地球エーテル光波は、何故、我等の眼に光線として寫らないのですか？」と。

余答へて曰く「贅澤云ふな。エーテルが地球燃熱子と熱氣作用をするが爲にこそ地球を自轉させ、亦地球上の人、空氣等の全物質が靜止状態にあるのだ、其副産物として地球エーテル光波が発生するもの故、其エーテル光波は地球に歸り來らずして、遠心力方向のみに働きて、宇宙に傳播、擴布するのだ。だから地球エーテル光波は、吾人即ち地球上の人の目には光線として寫つらないのだ。」と。

二 極光

然し、後刻になつて熟考するに、極地の上空には、地球を廻轉する爲に必要なならざる、即ち餘剩熱氣作用が発生するか（即ち地球燃熱子の内、地球廻轉軸延長方向に發散するものに對して、なされる熱氣作用）或は、前記の地球エーテル光波が、地球廻轉軸の延長方向附近、即ち極地方の上空にては地球に歸り得るやも知れず!? 等の不審を抱き、夫れを解決せんとして遂に極光に思ひ到る。實に極光こそは地球が、火・

木・金・水・星等の遊星と同様に、光輝する光源體であると云ふ證據を、吾等地球人類に實見・實驗、せしむる唯一のものなるが如し。
故に極光が、太陽黒點・地磁氣など、關連ある所以も判然せん。

三 地球の生命

地球（勿論、太陽・月・恒星・遊星・等も同様・同理なり）は^H燃熱子を主體とする陰・陽熱子の熱氣物にして、其熱氣作用によりて自轉し、因果關係を蘊釀して、即ち自轉によりて燃熱子は益々發生旺盛になる、此因果作用は永遠に行はるゝものなり。故に地球の生命は無窮なり。従つて、地球内部の旋回運動エネルギー||燃熱子調節、緩和の爲には噴火・地震、等は、安全弁として時々惹起することあるは止むを得ざる次第なりと云ふべし。

四 地球の内部・地震・噴火

地球は大なる酸素球の如し、地球は燃熱子の本尊なれども、^Hは^Hなしには絶対に熱氣作用を惹起せざるものなり。故に地球中心部には燃熱子のみ充滿すれども、現代科學の謂ふが如き熱騰するものには絶対なき理なり。かの酸素の充滿せる酸素瓶内の熱からざる状態や理論を以ても右の事實を了解するを得んか。

地球廻轉運動エネルギー即ち燃熱子は、地殻の爲に兎角發散すること不充分なるため、地殻の弱きところより爆發せんとす。是れ噴火及び地震現象にして、亦夫れ等が、週期的に繰返へざるゝ所以なりとす。

地球内部に鬱積されたる燃熱子が噴火口に爆出すれば、大氣中のエーテル原子が忽ち迎撃して熱氣作用を惹起して、かの噴火現象となるものなり。然れども吾等は錯覺して、噴火現象は、地球内部の火、又は高熱が、其まゝ噴出するものなりと想うて地球

の内部は火の凝塊なるもの、如し等甚しき認識不足をする所以なり。恰も、かのアセチリン瓦斯のランプの燈火を見て、火がランプの中より直接に噴火すると考へるが如し。此無智を敢てしながら夫れに躬ら氣付く能はざるが現代科學や科學者なりとす。

第二章にも記述せし如く、^H—^H エーテル原子が尠き程灼熱の熱氣作用は旺盛なるものにて、地球内部にて、此エーテル原子の存在せる限界、即ち地殻ある限界を知る必要は大いにあるも、其研究は容易ならざるべし。

昨年九月廿五日の大毎紙の報ずるところによれば「前帝大地震學教授今村明恒博士は來る十月十二日の學士院例會で、從來世界の地震學者が計算上で存在してゐると考へながら實際上ではまだ認めてゐなかつた、地震の横波を發見したことにつき世界的一大發表をなし、同時に學士院記録によつて世界の學界へ發表することになつた。發表の内容大略は——

一般に地球のある一點で起つた地震が、其正反對の地點に達するに要する時間は縦波廿一分、横波卅六分とされてゐたが、今まで各國の地震計が不完全であつた爲め此横波の方が感ぜられず、中には「横波が感ぜられないのは、地殻が液體に近いものだからではないか」と云ふものさへ現れるに至つた。然るに今村博士の新發見によつて、地球の内殻硬性の假説の正しいことが判つたのである。此研究は昭和四年六月廿七日東京の正反對の地點に當る南大西洋のサンドウィッチ島附近に起つた同年中最大の地震波が、東京帝大地震學教室にある、長周期地震計に感じ然かも最近にいたり、佛國ストラスブルにある地震學國際會議中央事務所から、前記地震の震源地が發表された爲、博士の研究もこれにもとづいて計算し此發表を見るに至つたもので「地殻は鋼鐵の約三倍近くの強度を持つ合體性」説が裏づけられ、學界は勿論、一般常識界にも一大革命がもたらされるに至つた譯である」と。

我熱氣學上からも右の説の如く有り得べきやにも想はる。然し夫れが事實であり即ち地殻が鋼鐵の約三倍近くの強度を持つ合體性であるとしても——余の説の如く、地

球内部即ち中心部が^H燃熱子たる氣體が充滿するものなりと云ふも、其中心部を圍繞する所謂地殻が、鋼鐵の約三倍の硬度を持つ合體性であると觀れば、右の説と齟齬するものに非るなり。逆に、若し今村博士が地球の中心部までもかゝる硬度の合體性なりと斷定さるゝものならば、余は絶対に肯定するを得ざるなり。

一 大噴火或は大地震のある度び毎に、^Hエーテル原子は、地球内部深くへ侵入せんとする。

二 地球の高速自轉により、地球内部の燃熱子量及びエネルギーを絶えず増大するものなること。

等して地球内部地殻の硬度を次第に蘊釀すべき理にて、是れおそらく地球及び各天體の壽命、自轉・公轉、等にも多少關係あるべきものならんか。茲に於ても從來の學說との顯著なる相異を觀ることを得べし。即ち現學說が「地球は外部よりの作用によりて（冷却などして）壽命を縮めつゝあり」と云ふに反し我説は「地球は躬ら動脈硬

化症に罹る憂あり」と云ふなり。

五 地球及び天體の自轉・公轉

吾人は、地球儀を觀察することによりて陸地、島嶼、海洋、の一般を知り得べし。

地球の自轉は、熱氣作用と謂ふ大力が、地球の箍にも似たる大陸・島嶼、に手を掛けて西から東に轉ばす現象なり。故に、西海岸により多く力が作用して斷層・斷崖を生ずるものならんか。現に各大陸共、西海岸に斷層多く亦港灣も少なきものゝ如し。

亦我國に於ても日本海に面したる即ち偏西方海岸は斷崖多く、港灣は尠し。

熱氣作用の爲に、現在の如き大陸の分布を生じたるや否や、現在の余には斷定する能はざれども、苟しくも地球儀を靜觀する程の人ならば、現在の大陸分布又は介在にちる熱氣作用の爲め、現在の南北を廻轉軸として、規律正しく西より東に廻轉即ち自轉するものならんと心付くなるべし。

地球廻轉運動エネルギーの爲地震や噴火現象ある如く、大陸・島嶼の状況も、よしそれが極僅少とはいへ、絶えず多少變遷しつゝあるものならんか。

地磁氣や其偏差の移動なども亦地球自轉の熱氣作用や太陽光波・月光波などに關係あるべきものならんか。

尙、大陸島嶼海洋の分布存在と熱氣作用とを考慮して思索すれば、地球の公轉の何ものなるかも判斷することを得ん。亦此の項を玩味する人は遊星の自轉・公轉等に就いても得るところあらんか即ち夫れ等は地球の如く大陸・海洋、などが存在分布すべき理なり。

太陽及び恒星が定置するが如く觀察されるのは、^H量大にして、従つて熱氣作用も旺盛なる爲、蒼生時代から地殻が、地球の如く異狀なる突飛即ち高山、山脈等を發生せざりし故にか、或は質量偉大なる爲、夫れ等の山や山脈なども、自轉の熱氣作用によりても、轉位即ち公轉する程の故障を招來せざる爲ならんか。然れども^H燃熱子に

は絶對靜止なる状態はなきもの故、太陽を首じめ凡べての恒星も、從來の地球の天文學者を嘲笑しつゝ、絶えず多少變位しつゝあるべき筈なり。(我説の出現によりて天體引力の正體暴露したるを以て、太陽系たる地球を首じめ他の遊星が、太陽の引力的指導によりて規律正しく公轉運行しつゝあると云ふ從來の説をも吟味せざるべからざるなり。夫れ等が同一母體より創生されたるや否や、そこまで想像する能はざれども、寧ろ、かゝる規律正しく運行する同類の星が、無限期間のうちに太陽の周圍に現在の如く都合よく相集まりたるものと解すべきか。)

六 低氣壓

が發生すれば、其低壓部は^H燃熱子が多少減ずる爲^Hエーテル原子との熱氣作用不足するを以て——地球自轉により、地表面より空氣が遅れざる爲に、西から東に常に、空氣を押しやつてゐる力が不足するに似た結果になり——低壓部は、地球廻轉

に遅れる、或は取り残される状態になる。是れ低氣壓が発生當時西進する所以なり。是を以て觀ても、物質たる空氣が、高速度にて自轉しつゝある地表に、漫然或は神秘的に喰ひつきて、吾人に恰も靜止状態にあるが當然なるやに思はれて、其理由が今日まで少しも闡明せられざりしとは雖其實、熱氣作用と云ふ妙法或は神祕作用の爲なりし理由は了解さるゝならんか。

七 赤道海流

同じ地球表面上の二大流動は、遊動物質たる海水と空氣なれども、空氣に比し海水は比重或は密度大にして、従つて含有燃熱子の量多大なるも、夫れに交合せんとするエーテル原子は海水の表面の燃熱子にのみ多く熱氣作用して、とかく下方部のものに及ばざるものなり。然して此現象は海底深ければ深き程顯著なりとす。故に地球自轉速度最大なる赤道地方にては、海水は前記の如く熱氣作用不充分なるを以て、地球の

廻轉に取り残さるゝ状態になるものなり。是れ赤道海流の發生及び同海流が西方に流るゝ所以なりとす。

右の逆により、即ち、發生當時の低氣壓が偏西方に移動し、又は赤道海流が西流することによりて、地球が西より東に高速度廻轉する所以を説明することも得べし。

高氣壓が、低壓部へ、又は偏東方に急激に流動或は移動するも熱氣作用ある爲なり。

八 エアポケット

エアポケットも亦熱氣作用ある爲なり。將來天體及び地球熱氣學が發達するにいたれば、氣象學に貢獻するところも偉大なるべく、爲に飛行家に裨益する時代も來るべし。

第八章 熱帯と寒帯・太陽

一 地球に熱帯と寒帯とあるは

- (一) 地球^H \parallel 燃熱子が、寒帯よりも熱帯に比較的多量・多分に存在する爲なり。
- (二) 熱帯は、太陽との距離多少近く、亦科學に謂ふ太陽直射角の關係も勿論影響ある爲なり。

然れども、太陽エーテル光波が寒冷なりとせば、第二の事實がデレンマに陥るやに思惟さるゝ人も有らんかと思ふ故に、左に説明すべし。地上が溫暖なる爲には、換言すれば太陽光波が、光熱線たる爲には、

- (一) 太陽エーテル光波が甚しく強力なるものにして、其力にて地球燃熱子に旺盛なる熱氣作用を惹起せざるべからざること。

(二) エーテル光波は本來寒冷なるもの故、其波動力は強烈なるものを要するも、其量は却つて、可及的少量なる程熱氣作用には有效なるべき理なりとす。

宇宙に瀰漫する無数の星は光輝燦爛として、地球人類に開闢以來憧憬され、讚美され、渴仰されたりとは雖其實、寒冷なるエーテル星光波を間斷なく送りて、地球上を冷寒地獄に化せんとしつゝあるものなり。(嗚呼、かの美麗なる星の群が無かりせば！美女の冷酷無かりせば！)

是れ夜が寒冷なる所以なり、亦特に、晴天の夜が寒冷なる理由なり。故に、地上の冷寒地獄を救済する爲には、斯の燦然たる星の光 \parallel エーテル星光波を追ひ拂はざるべからざるなり。然らば如何にして？

太陽こそは實に、地上の救ひの神であり、亦、此追拂役者たるなり。太陽は、其直徑地球直徑の一〇九倍餘ありと謂はるゝも、我等の眼には、直徑一尺足らずの光輝ある盆と寫つるにすぎずして、天空の廣大なるに比すれば甚だ小なりと雖、此元氣なる

暴れ者は、高速自轉によりて強大なる太陽エーテル光波を發生し、其強烈なる波力を以て、意地悪く地球に押寄せ來る無數のエーテル星光波を追拂ふもの故、晝間は地球上にては殆ど太陽エーテル光波のみが或は其大部分なるべし。仍て此時は、地球上には押し寄せ來る寒冷なるエーテル光波の量が最も尠き故に、日中は溫暖なり。

然れども、太陽エーテル光波も勿論、本來寒冷なるもの故、夫れを遮斷する雲が存在するときは、即ち曇天の節は、晴天の時より却て蒸し暑く亦温度も上昇する理なり。

同理によりて、晴天の暗夜より曇天の暗夜の方が稍々溫暖なること及び晴天の夜明けに霜の降る等の理由も判然すべし。亦霜害を防止するには火を炊きて烟を發生して即ち人工^H燃熱子を多量に生産して、寒冷なるエーテル星光波に備へればよき理なり。

歐洲の如き高緯度の地が、比較的氣候溫暖なるも、人口稠密し亦工業も發達して、

人工^H燃熱子を旺盛に、大量に生産、發散する所以なり。

昨年三月卅日我妻問ふて曰く「そんなら、春夏秋冬は何故あるのですか？」と。當時、未だ夫れに就きて考察せしことなかりし故に、余多少辟易たりしと雖、我原理を玩味される人には、今更ら説明の要もなからんか。

秋の彼岸の中日に、多少氣候の變動ある年でも、秋の蟲が鳴き初めて、吾人を驚歎さす場合あるは——艦船の忠實なる無電技士が、規定されたる波調に、檢波器を調整して當番するが如く——秋の蟲の檢波器たる感覺に、太陽や月のエーテル光波^H引力波が感應する所以ならんか。

常夏の國に近かき安南東北地方の山や島の草木が、三、四月頃になれば、萌ゆるが如き新緑を呈して、我等マドロスが遠き故國の春を懷想する因を爲すも、追拂役の太陽が漸次近かづきつゝあることを知らせの太陽エーテル光波を、草木が感應する爲なり。

二 月光・太陽黒點

月は質量も少く、従つて自轉速度も大ならざる爲、月及び月引力の場の自轉によりて發生する月エーテル光波は、地球引力の場に入り來りても、光波としては不充分的なため、強力なる太陽エーテル光波の援助或は干涉によりて初めて斯の朗明なる月光を現出して讚美さるゝものなり。

三ヶ月の虚げたる側の周邊が、赤道地方にては多少明瞭に見得るは、赤道地方の空中には^H燃熱子が比較的多分にありて、月エーテル光波との熱氣作用顯著なる爲なり。

亦熱帯地方の海洋の天空にて、種々なる美しき赤色の雲の殿堂に、航海の徒然を慰安さるゝ場合あるが、夫れ等の雲には多分なる燃熱子が含有さるゝ爲なり。

太陽には、地球と同じく地殻や大氣の存在すべき理は略ぼ説明し得たりと信ず。然

して質量も廻轉速度も共に莫大なる太陽と其燃熱子の安全辨として噴火現象は當然有るべき理なるは勿論なりとす。是れおそらくは、太陽黒點の存在する所以なるやに想はる。

斯く推定することによりて、黒點多く發生すれば、地球上の氣象、溫度、地磁氣、極光、等にも多少の變化を招來すべき理なることも説明するを得んか。

然して、大陸や海洋等の存在すると云ふ太陽が、何故灼熱球の如く見ゆるものなりや？と愚問を發する非科學者は——我原理のことはさておくとするも——テレビジョンや電送寫眞の流行する現代には、懼らく皆無と思ふ故、説明はも早省略する次第なり。

第九章 農學と熱氣學

一 窒素肥料

窒素肥料こそは——地球人類が、電氣を發明して人造太陽光線を創造したるに反し——太陽光線を地中に埋めて肥料としたる、實に甚愉快なる大發見なりと謂ふべし。農學が此諧謔を眞に悟得する曉は、得るところ偉大なるべきなり。

窒素肥料は $-H$ || エーテル原子を多分に含有するものゝ如し。夫れに反して磷酸肥料は $+H$ || 燃熱子を多分に含有するものならん。夫れ等を、現代農學或は肥料學が、如何に科學的に即ち學理的に取計ふか、余は未だ見學するの機を有せざれども、現今の高等理學には比較的縁遠く想はれる農學や農業が、我原理に謂ふ $-H$ と $+H$ との兩熱子を實用中なることは實に面白き次第なりと云ふべし。これ理學を基礎として夫れに立脚せる工學が人工的なるに反して、高等理學に縁遠くして只天然自然や實際に則して或は多くの經驗に立脚せる農學が、却て眞理に近づき得る所以にして實に愉快なり。

二 植物と動物

葉 || 肺。

皮 || 肺と皮膚。

根 || 胃腸。

筋 || 神經。

土壤と肥料 || 食物。

斯くも植物と動物とは相似するものなり。然して花は、女性の月經血に該當する年經血に例へ得べけん。

植物中の $-H$ || エーテル原子は、動物に於ける靈子の如く、植物中の主要分たる $+H$ || 燃熱子が萌えすぎること抑制、御すると共に、植物としての生氣 || 生命を維持する作用を爲すものなり。動物の呼吸が $-H$ || 窒素を主とし $+H$ || 酸素を従として攝取するが如く、植物も亦 $-H$ || エーテル原子を多分に含有するものたる窒素や水素（即ち水）は必要缺くべからざる所以なりとす。然して勿論酸素吸入は従たるなり。

三 植物の生育

太陽熱が、植物の成長繁茂に重大なる關係あることは衆知の事實なれども、其理由を眞の學術的に穿鑿することの、現代農學に不可能なりしは是非もなし。

右の場合、太陽熱なるものは、太陽躬らの暖暑熱による所以なりと從來考察されたるも、事實は然らずして、成育・繁茂の爲めに萌えるものは或は直接夫れを援助するものは、植物を組織する即ち含有される^H。燃熱子と、土壤や肥料の中の燃熱子となり。

太陽が南回歸線にある冬の頃は、地球上北半球では^H。エーテル原子量最も多分。多量に存在する爲、従つて植物の葉や幹枝から吸収するエーテル原子量も多分にして、植物中の^H。燃熱子は抑制されて活躍する能はず、故に根を以て地中より^H。燃熱子を補充・吸収する要も少し、是れ植物の冬眠状態なりと云ふべし。(母は兒が將に

眠らんとする頃寐替へさせ、兒が深き眠りより醒めんとする頃甘味を與へて兒の氣嫌を取りて成育を心がける次第なり。是れ植物の植替時期や理論を象徴する余の戲言なり)此頃が植物の植替へに最も適するなるべし、何んとならば根の活躍を必要とせざる頃なればなり。

太陽が天の赤道に接近する春の彼岸の頃になれば、太陽エーテル光波の關係上、地上にはエーテル原子量が漸次減少しつゝあるを以て、草木が吸収するエーテル原子量もだんく減少するため、草木中の燃熱子は其習性を發揮して、葉・花・芽、或は花・葉・芽、など各特有の慣性によりて次第に燃え或は萌え出すものなり。従つて根も活動を命ぜられ土壤や肥料中より燃熱子の補充・吸収は漸次旺盛となる所以なり。(此頃肥料の要も多からんか)

夏は其の地上のエーテル量が最も減少する故、草木中の燃熱子の活躍顯著にして、葉や莖などの緑青の色も愈々紺碧する所以なり。

秋の彼岸頃から太陽は再び天の赤道を通過して漸次吾等より遠ざからんとするため、地上のエーテル量は漸く遞増を始めるを以て、草木の燃熱子の活動も抑制されるの機運に入り、遂に燃熱子の大部分は最期の花たる紅葉にて其身を飾り、纏て落葉となり、吾等が冬の無情をかこつ頃、植物は冬眠状態に安息するものなり。

四 肥料論

窒素肥料は $\text{H}-\parallel\text{H}$ エーテル原子

磷酸肥料は $+\text{H}\parallel\text{H}$ 燃熱子

を主體とするものゝ如し。

太陽の光波がエーテル原子量最も少なきために斯の太陽光熱線となる所以は既に説明したり。故に太陽の直射を受けざる土地或は寒帯にてはエーテル量多分なるを以て肥料の必要ある場合は燃熱子性肥料を施さざるべからざるなり。

肥沃にて作物の出来すぎる土地、太陽の直射の影響を多分に受けすぎる土地（熱帯など）及び或種の植物（米の如き）などには、エーテル原子性即ち窒素肥料の要あるべし。

豆糟・堆肥或は植物を其まゝ埋めて役立つ肥料などは燃熱子性肥料なり。人糞はエーテル性肥料にして、殊に小便肥料は其尤なるものならんか。（若人達の小便よりホルモン劑を創生して、所謂ホルモン缺乏症の人の肥料に使用するも甚だ愉快なる次第なり。）

讀者は、電磁波がやはり燃熱子肥料なるべきことに當然氣付かるべし。實に、ラデオステーションが設置されたる地方の植物に對して、ラデオ電磁波の影響多分にあると謂はるゝも所以あるかな。

故に、電磁波は植物の直接燃熱子増加肥料にして、太陽熱は植物中の燃熱子活躍肥料、即ちエーテル減少肥料法なりと謂ふべし。

此兩者の區別は最も注意を要する點にして、夫れを判然了解するを得ば、如何に又は何故太陽熱が優秀にして植物や動物即ち生物に必要缺くべからざる所以かをも釋然たるべし。

彼の醫學が、單に太陽の熱が人體に必要缺くべからざることだけを——馬鹿の一つ覺へをして、其熱だけを模倣した太陽燈や電磁氣を治療に、味噌糞ゴツチャにして、使用して、得意然たるは、實に笑止を過ぎて寧ろ惻隱の情禁じ得ざる次第なりと謂ふべきのみ。

余は今、肥料學者に試験問題を課せんとす。「禿頭病に有效なるは、太陽熱か、はた人工太陽燈熱か、その何れなるか？」

禿頭病は、地ハダの榮養不良即ち燃熱子缺乏によりて招來するもの故、此場合の肥料法としては、寧ろ人工太陽燈熱を以て地ハダの榮養——燃熱子量の増加が先決問題たらざるべからざるなり。同理によりて養毛法を按ずるに、摩擦——方向運動——旋回運動

——燃熱子製造法なるを以て、局部を赤くなるまで、常に摩擦して、局部の燃熱子増加即ち榮養をよくすれば有效なる理なり。然るに只アルコオル性の刺戟を與ふることを以て満足するは笑止の至りなりと云ふべし。局部の地ハダに刺戟を與へて目を醒ますんとするも、局部に本來力なきを如何にせんや、常に手綱さへシメれば、力なき瘠せ馬でも、走るものと考ている阿呆は何者ぞ？（右の場合摩擦したあとへニンニクをスリ込めば一層有效なるべし）

農學と云ふも、醫學と云ふも、肥料學と云ふも、ハタ榮養學と云ふも、要するに同じ流れの谷川の水にすぎざる點によく心せざるべからざるなり。

（余が、肺病治療法に就いて、極度に榮養衰へたる——燃熱子缺乏せる患者に對する日光浴に就いて警告せんとするは此項に説明したる理由あればなり。）

五 果實や植物の味

-H || エーテル原子を多分に含有する植物や果實の味は酸ばい即ち酸味と辛ら味を以て代表するを得ん。梅・ニンク・葱、等の味を以て想像するを得ん。此味の特徴はとかく舌を烈しく刺戟するに有る。其次ぎは松葉、などの如き澁味なり。

+H || 燃熱子を多分に含有する植物や果實の味は甘味を以て代表するを得ん。ドリヤン・マンゴ、等熱帯産の果實のうちには、舌を溶かす程にも美甘味なるもの多きは、熱帯には燃熱子多分に、エーテル原子は多少少分に存在する、其影響に因るものなればなり。

(畑にて夏實のる麥は燃熱子を多分に、水田にて秋實のる米はエーテル原子を比較的多分に含有すべき理なり。麥が寒温帯人種たる碧い眼、白哲の皮膚、金髪即ちエーテル原子を多少多分に保持する人種の常食に、米が熱温帯人種たる黒い髪と黒い瞳、黒或は褐又は黄色人種に嗜好せらるゝは、實に自然の攝理なりと云ふべし。) 妊婦が梅などの酸味の物を熱烈に慾求する場合は、胎兒の創造に -H || 靈子即ち

エーテル原子が甚必要なればなり。

人の性質・嗜好、等も凡べて此 -H と +H との配合による作用なるを思はゞ熱氣學の範圍や實に無限なりと云ふべし。

六花の色

-H || エーテル原子を比較的多分に有するものゝ代表の色は、透明・無色なれども、其次ぎは白色、其次ぎが青或は緑ならんか。

+H || 燃熱子を多分に含有するものゝ代表の色は赤色にして、次ぎが黒色ならんか。空の色、海や淵の色、神經の色、寒温帯又は寒帯人種たる白哲人種の瞳の色などはエーテル原子が相當にあることを象徴するものなり。熱帯の花の多數が赤色や紫色の毒々しきものあるは燃熱子の量過多なる證據なり。

肥料・光線・風土・熱線、等エーテル原子と燃熱子との關係によりて、味・色・榮

養價值、等種々様々に變化することに思ひ到らざるべからざるなり。

七 植木屋

植木屋は春の初め頃松の木を植替へするとき、木の皮に泥を塗りて、木の枯死するを防止せんとするなり。何故ぞ？ 木の皮は肺や皮膚に該當するものにして（後章無有哲學にても説明する如く）空中より主として $-H$ || エーテル原子（即ち窒素）を吸収して、木の大部分を占むる $+H$ || 燃熱子が異常に燃え || 萌えることを抑制しつゝあるものなり。

冬の終から春の始頃になれば、太陽が天の赤道に接近して吾等に漸次近づかんとするを以て、地上のエーテル量は漸次減少して薄くなり行くものなり。（是れ温暖になる原因なり）松の皮は夫れ等の、即ち減少したるエーテルを吸収するやうになるを以て、爲に多分にある松の燃熱子は燃え || 萌え出さんとす、言ひかへれば松の成育旺盛、

活潑になるなり。茲に於て松は燃える燃熱子の補充を、土壤中の燃熱子を、根を以て吸取ることによりて解決せんと要求するも、植替へたばかりの其松の根は未だツカズして役立たざる爲め枯死する危険あるなり。

故に其コツを知る植木屋は泥を以て松の皮を塗りつぶして、松自身の燃熱子が盛んに萌えすぎる因を爲す、かの稀薄なる $-H$ || エーテル即ち窒素の吸入を制限する所以なり。實に春秋の筆法を以てすれば、現代の科學・哲學は、我國の植木屋にオトルこと數等なりと謂ふを得んか。（現代農學が夫れに就いて如何に屁理屈するや知らざれども、萬物に靈效あると謂はれる太陽熱或は光線が、此植替えたばかりの松の木や皮にだけは有害あるとは、現代科學には不合理或は神祕ならざるにや？）

八 太陰曆

古來農業者が、太陰曆を重寶せしは、舊正月にゆつくり休養慰安し、或は舊盆の満

月の頃盆踊を快樂する爲のみの必要にはあらずして、月のエーテル光波 \parallel 引力波が \parallel 潮の満干を招來する因となるが如く \parallel 農作物にも甚しく影響する理由あることを知らざるべからざるなり。其理由は、も早や讀者は篤に充分了解されしこと、思ふ故、記述を省略する次第なり。(萬事解決可能なりとウヌボレ強すぎたる現代科學は、今や己れの無學に愛想をつかさざるべからざるの夏とはなりぬ。ア、)。)

第十章 工學と熱氣學

磨擦・壓縮・加熱・鍛鍊、等は $+\text{H}$ \parallel 旋回運動 \parallel 燃熱子の製造又は生産作業なる理は既に屢々記述したるとほりなり。

刀鍛冶は、刀を、加熱し、鍛鍊して、刀の $+\text{H}$ \parallel 燃熱子を彌が上にも増加することに苦勞するものなり。然して時々水に浸す。此水の加減のコツこそ最大重點なれ。水は

水素を主體とするものであり。多分、多量に $-\text{H}$ \parallel エーテル原子を含有するものなり。故に鍛へたる刀を時々水に浸すことは、 $+\text{H}$ \parallel 燃熱子のみにては鍛鐵力即ち鐵の分子の凝集力・原子親和力、に不都合なる故にかく $-\text{H}$ \parallel エーテル原子の極少量を混合或は交合するなり。實に此僅少なる水の $-\text{H}$ \parallel エーテル原子は、 $+\text{H}$ \parallel 燃熱子を固結さす糊 \parallel 原子親和力、或は化合力の用をなすものなり。無有哲學にては $-\text{H}$ \parallel エーテル原子 \parallel 靈子と云ふ。故に刀を焼いて鍛へて、時々水に浸して $-\text{H}$ \parallel 靈子を吸収なさしむることは、恰も刀に靈を授けるが如き作用なりと觀づることも得んか。

刀の鍛鍊秘術は、 $+\text{H}$ \parallel 燃熱子の莫大量と、 $-\text{H}$ \parallel エーテル原子の極微量との交合比率即ち分量と、交合する時機や方法等のコツならざるべからざるなり。かのカイゼル帝が嘗て、自慢の化學や工業技術の粹を以て、世界に冠たる日本刀に劣らざる刀を、鑄鐵法によりて製造可能なるやに豪語されしかに聞くも實に理由ある次第なりと云ふべし。

萬有還金論を嘲笑せし從來の科學や化學者等は今や實に、萬有還寶石術に驚歎、刮目すべき時代たらんとす。我熱氣學が進歩・發達する時代には、金屬が溶解して、 $-H$ や $+H$ の氣體に變化、還元することが何等の不思議ならざるが如く、所謂無より、或は、萬物を變化して貴金屬や寶石を創造或は製造することは、勿論可能なるべき道理なりとす。亦榮養食物等に關する化學や工業も發達して、人類や其社會に甚大なる歡喜や幸福をもたらすならんか。

原子親和力の陰陽性

原子親和力(分子凝集力或は化合力)に左の二種あり。

(甲一) $+H \parallel$ 燃熱子の大量に、 $-H \parallel$ エーテル原子の極微量を交合・化合せるもの。

(甲二) 燃熱子が、エーテル原子より、多少・多分にあるもの。

(ダイヤモンド・金屬・酸素・炭素・錫箔・エボナイト、等)

(乙一) $-H \parallel$ エーテル原子の大量に、 $+H \parallel$ 燃熱子の極微量を交合・化合せるもの。

(乙二) エーテル原子が、燃熱子より多少・多分にあるもの。

(水素・窒素・空氣・水・絹・硝子、等)

此極微量、或は多少少分にある異性の熱子は、大量或は多分にある相手の熱子を結合する糊の如き效用・作用を爲すものなり。是れ物質創造の熱氣作用にして所謂原子親和心、分子凝集力又は化合力なりとす。

熱氣學にて、陰・陽熱子は「同性は相互に牽引す」と云ふも、「同性は相互に結合す」と云ふにあらざることにも最も注意を要すべきなり。結合 \parallel 交合 \parallel 交接 \parallel 化合、するためには、異性熱子——よし如何に極微量たりとも——との熱氣作用は絶対に必要缺くべからざるものなり。右の如く兩熱子が交合して、初めて物質を創造或は組織するものにして、「同性結合す」と云ふことあるも、そは——異性熱子の幾分を交合したる——物質の同性相互が結合 \parallel 交合せんとする——水が水に、油が油に、電氣が電氣

にの如き、事實を意味するものなることに特別留意せざるべからざるなり。

「高熱を加ふれば、如何なる物質と雖、氣化せざるものは絶對になし」。是れ現代化學の常識なり。加熱即ち原子 \parallel 熱子の生産や増加法なりとす。

物質を氣化する方法に左の二種あり。

(一) \parallel 燃熱子増加 \parallel 暖暑熱を加熱する法。

(二) \parallel エーテル原子増加 \parallel 寒冷熱を加熱する法。

前者は、物質に \parallel 燃熱子を増加 \parallel 加熱して、糊の作用中なる \parallel エーテル原子を悉皆排撃し盡して、遂には燃熱子のみとなして氣化する法なり。

後者は、物質に \parallel エーテル原子を増加 \parallel 加熱して、糊の作用中なる \parallel 燃熱子を悉皆排撃し盡して、遂には只エーテル原子のみとなして氣化する法なり。

前者の例として按ずるに、 \parallel エーテル原子の絶無なるべき地球中心部（即ち地殻内部）は、現代科學の謂ふが如き固體・流體、等にては絶對なく、只氣體たる \parallel 引

力原子 \parallel 燃熱子のみなるべきことの想像や理由の説明も可能なるべし。

後者の例としては、前章に於て譬喩せし「萬一、月が破裂したる場合は、其地殼は最大寒冷熱の爲め全部溶解して \parallel エーテル原子に還元し……」と云ふことの眞理も今や、釋然するなるべし。

第十一章 萬物無有論 附 靈子波

萬物は凡べて、

\parallel 燃熱子を主體として、 \parallel エーテル原子を客體として、

或は、

\parallel エーテル原子を主體として、 \parallel 燃熱子を客體として、

同性は相互に牽引し、異性は反撥又は交合・交接・化合の熱氣作用によりて組成・

創造せらるゝものなり。

物體の質量は絶対不變のものにあらずして時々刻々に變遷・變化しつゝあるものなり。實に、⁺H^H || 燃熱子製造・生産機關たる地球上には、一として休憩・靜止・不變のものは絶対になし。爲に、物質を圍繞する空中の⁻H^H、⁺H^Hも亦絶えず其物質中の⁻H^H、⁺H^Hに同性牽引し、異性は反撥或は交合・交接して熱氣作用をしつゝ有るものにして、夫れ等の兩熱子群は錯綜・攪伴・動搖して、⁻H^H || エーテル波又は、⁺H^H || 燃熱子波（現代科學に云ふ電磁波）として周圍に、間斷なく擴布・傳播するものにして、其狀態及び事實を吾人に目撃・實驗する唯一の、貴重なる現象として斯の陽炎（カゲラウ）あるなり。實に陽炎を目撃することによりて、右の事實を推定することを得る所以なり。右の⁻H^H、及び⁺H^H、波動或は波長が、ラジオの檢波器に該當する役目又は作用するところの、目に、感應するものを、光り・影像、等と云ふ。耳に、感應するものを、音響と云ふ。

鼻に、感應するものを、香匂と云ふ。

皮膚に、感應するものを、熱と云ふ。

空中にラジオ電波が無數に散在する現代でも、檢波器或は受信機に依るに非れば吾人は、ラジオ電波の存在を知るに由なし。

同理によりて、

目無くば光線なし。

耳無くば音響なし。

鼻無くば香匂なし。

人即ち生命なくば人生—神佛—萬物なし。これ無有哲學或は無有教の根本原理を爲す所以なりとす。

人體も亦、勿論、⁻H^Hと⁺H^Hの交合による物質なるを以て、夫れを圍繞する空中の⁻H^H、⁺H^Hも同性牽引、異性は反撥又は交合して、⁻H^H波、⁺H^H波を絶えず惹起して周圍に傳播・

擴布するものなり。是れ俗に謂ふ人の氣配 \parallel ケハイなり。或は動物電氣と云はるゝも是を意味するものならんか。

又彼の神靈術者等が、掌から靈光線或はオーラを發散すると云ふも右の現象の一部なるが如し。

身心統一によりて、或は精神作用によりて、腦部・掌・丹田、等に精神を集中し又は力を入れ等して、所謂靈動作を起こして治療を爲すことも可能なるべき理なり。

然して此れは H 波 \parallel エーテル原子波動に屬するもの故、 H 波動 \parallel 電磁波より滲透力や傳播力強き理なりとす。

ラジオ電波

ラジオ電波は、 H 燃熱子波動なることは屢々記述したるとほりなり。日本に於ける、發信のスパークはアンテナによりて空中に發せられ、 H 燃熱子波動として周

圍に傳播擴布す。途中臺灣の高峰や陸地近傍に散在する多量の H 燃熱子の爲めに熱氣作用を惹起されて障害され、恰も道草を食ひつゝ行く状態にあるを以て漸次遅刻し、又傳播エネルギーをも著しく故障され等するを以て、臺灣海峽南方海上の艦船の受信檢波器の感應度を甚障害する結果を招來するものなり。

亦夏期又は熱帶地方にて空電の爲め故障されるのも、雷電なる燃熱子波動による障害なりとす。

夜間より晝間の方が感應惡しきは、晝間は地上に、 H エーテル原子の總量が減少するため、空中の H 燃熱子が活躍して太陽光線や晝の現象を呈するを以て、其活躍中を泳ぎて擴布するラジオ電波も勿論巻き添へを喰ひ即ち熱氣作用の仲間入りしつゝ、行く爲に傳播効率不良となる所以なり。

第十二章

一 燃燒と窒素

化學書によれば、燃燒には窒素は絶対に必要なきやに云はるゝ如くなるも、燃燒が正常なる空氣中にて爲さるゝ場合を考察するに、空氣中には21%の^H性たる酸素と、78%の^H性たる窒素の存在することに注意せざるべからざるなり。既に説明せし如く、燃燒は熱氣作用の一部なるを以て、^Hエーテル原子は絶対に必要缺くべからざるものなれども、其量は極少量にて足りるものにして、夫れを主體とする窒素は空中の78%を占むること故、其存在或は效果については特別に考察又は研究する程の痛痒を感ぜずか、或は頓着の要なかりし爲に、從來の化學に於ては只、小比率に存在する酸素についてののみやかましく論究されたる所以ならんか。

〔一〕 空氣中にて燃燒する物質は、酸素中にて一層熾んに燃燒して強き光を放つのみならず。

〔二〕 空氣中にて燃燒を持続するに困難なる物質も亦よく酸素中にて燃燒す。化學書

然し右は、只單なる一時的現象、或は事實にすぎざるべし。かの炭素も酸素も共に

^H燃熱子を主體とするものなれども、夫れ等が混合して多分・多量に存在するやに

想はれる炭酸瓦斯中にて、燃燒惡しき或は不能なるは^H燃熱子が多すぎて、^Hエ

ーテル原子や窒素が少なすぎるためなり。

實に、優良・良好なる普通一般の燃燒は地上の平常なる空氣中にて爲さるべきものにして、夫れより、

〔一〕 地中に下るに従つて、^H燃熱子（炭素や酸素）が多分・多量になり、逆に^H

エーテル原子（窒素や水素）が少分・少量になりすぎるため、

(二) 上空に上るに従つて、 $+H$ || 燃熱子 (酸素等) が少分・少量に、逆に、 $-H$ || エーテル原子 (窒素等) が多分・多量になりすぎる爲、共に燃焼不良又は不能になるべき理なりとす。

【硝子の真空球内に、油を吸入する装置ある燈芯を入れ、亦此真空球内に酸素を充滿し、擴大鏡 || 凸レンズを以て太陽光線を集めて (或は電線を導いて、其火花を利用するも可なり) 點火する實驗を行へば、俱らく完全なる燃焼作用は惹起せざるべし、是れ窒素皆無なる爲か或は酸素過多なる爲か、又は其どちらもの爲か、なればなり。】
 若し現代化學の謂ふが如く、窒素は燃焼には絶対不必要なりとするも、普通一般の燃焼が、正常なる空氣中にて爲さるゝもの、又は爲されるに適當する事實を思索せざるべからざるなり。今少し具體的に云ふならば、普通一般の燃焼は、21%對78%の比率を持つ窒素に配合する酸素中にて爲さるゝもの、即ち斯かる濃度の酸素のみが燃焼に必要なものと觀ざるべからざるなり。斯く觀ずれば、斯かる濃度の酸素を得るため

には、現在の窒素を絶対に必要なとすべきことにも當然思ひ到らざるべからざるなり。かゝる普通の酸素存在せざる、地中などは、燃熱子量 (|| 炭酸瓦斯) 多すぎ、逆に窒素少なすぎる爲燃焼不良又は不能を招來する理なり。

今假りに、從來の醫學説の如く人の呼吸するは、酸素を吸入するが唯一の目的なりとするも、此酸素も亦、窒素78%に對する21%の比率ある濃度の酸素が必要となると云ふ點を觀るだけにても、余の謂ふ「人の呼吸は窒素攝取が主にして、酸素は従なり」の言についてもさまで驚くに及ばざるならん。(況んや窒素は身體内の $-H$ || 靈子の補充・補給なるに於ておや)。

從來の化學説の如く、酸素を絶対不可分の元素と觀れば、酸素の濃度、云々につきては右の如き言を爲すを得ざる理ならん。即ち酸素には密度も濃度も絶対無き道理なることに注意するを要する所以なり。

茲に於て、余の説の如く、燃焼には窒素も亦必要缺ぐべからざるものにして、其重

要さより觀れば、窒素が78%、酸素が21%たらざるべからず——と極言するも、穴勝ち余のパラドクスにあらずして、正しき眞理なることに思ひ到らざるべからざるなり。これのみにて現代化學に對する偉大なる頂門の一針ならずや？

此章の例に採りたる化學書よりの拔萃にもある如く「空氣中にて」と一々言明する以上、何故に百尺竿頭今一步突き進むだけの智が、開闢以來廿世紀の今日に到る地球の化學者に、缺けたるにや？ 實に、余が驚歎至極なる所以なりとす。

【笑話一九三三・七・七、夕食卓にて。「化學書によれば、燃燒には酸素は絶対必要なれども、窒素は却て有害だとある。又、空氣は78%の窒素と、21%の酸素とより成り、普通一般の燃燒は通常の空氣中にて最も良好なりとも云ふ。いゝのか？ 然らば燃燒に窒素は必要あるか、どうか？」妻「さうすりや。必要ある理屈になると考へますが」。「然らば、燃燒には窒素と酸素と、どちらがより以上必要となる理屈か？」。妻「窒素の方でせう」。「うむ。出かした。流石は我輩のベッドだ。お前は從來の如何

なる化學者よりも話せる！」

將來或は後世の維新化學は $-H$ エーテル原子及び其流れを汲む窒素や水素の研究或は再検討に進展するならんか。實に、從來の如く $+H$ 性たる酸素・炭素、のみの鐘愛に偏せずして $-H$ 性たる窒素・水素、への憧憬にも心配するの要あるべき理なりとす。

二 氣壓・眞空

「大氣の壓力——氣體の密度は甚だ小さく重力の作用を受けることは極めて弱いが、地球の周圍を取りまく大氣は廿里以上の厚さに及んでゐるから、其重さで地上の物體に壓力を及ぼす。この大氣の壓力を氣壓と云ふ。氣壓の強さはトリチエリーの實驗から知ることが出来る、——理學書」

「空氣は重力によつて引かれ、地球を圍んで大氣をなす。大氣が地面や大氣中にあ
る物體を壓す力を氣壓と云ふ——理學書」

マグデブルグの半球を合はせて、其の中の空氣を排除すると兩半球を引き離すことは容易でない。——も右の氣壓の實驗例の一部として用ひらるゝものゝ如し。然れどもかゝる強力なる、所謂氣壓現象なるものが、萬一現代理學の説明するが如きものならば、軟泥上に置かれたる輕量物質たる木板片の如きものも、上方より受くる強大なる、所謂氣壓とやらの爲に、泥中に壓迫されて埋めらるべき理ならん！。其他かゝる不合理や不見識を實驗、或は證據立てることは容易なるべし。

かゝる事實は氣壓の作用と云ふより、寧ろ真空の神祕に歸せざるべからざるなり。天然は不自然を絶対に嫌惡するものなり。故に天然は、人工的につくられたる真空を、不自然として絶対に嫌惡する所以なり。

地球表面近くの真空中には、78%の H —||エーテル原子と、21%の H +||引力原子||燃子とが存在すべき所以は既に屢々説明したり。

故に科學的||嚴密なる意味よりすれば、現代理學の謂ふ真空は、眞の真空にあらず

して、單なる無空氣||無大氣にすぎざることには注意すべきなり。強いて眞の真空を求めんとするならば、地球引力の場外の、單にエーテル原子のみ存在する宇宙か、或は H +||燃熱子のみ存在する地球中心部とが、所謂の真空に該當するべく、前者を宇宙真空||陰性真空、後者を地球(天體)真空||陽性真空とでも云ふべきならんか。然し斯れは真空に對する概念として説明するのみにて本書には只從來の意味の真空につきて論ずることとせり。

眞 空 氣

空氣を眞似て、真空内の陰・陽熱子||兩原子を單に眞空氣と余は云はんとす。即ち真空中に於ける空氣たるの意なり。又、普通の空氣と區別する爲なり。

眞空氣は、 H —||エーテル原子(78%)、 H +||引力原子||燃熱子(21%)。

空氣は、 H —(性)窒素(78%)、 H +(性)酸素(21%)より成るものとす。

真空を壓迫する偉大なる力即ちエネルギーは、

- (一) 空氣の $(-H)$ 窒素が、真空氣の $-H$ エーテル原子に。
 (二) 空氣の $(+H)$ 酸素が、真空氣の $+H$ 燃熱子に。

エネルギー或は密度の大なるものが、小なるものの同性を襲撃して平均せんとする水平運動作用或は同性牽引力或は作用なりとす。恰も――

余が既に説明した通り――本來同種の燃熱子でありながら只、電位の高さものより低き物への同性牽引作用たる電気や電流の現象或は作用と同様のものなるを以て、夫れによりて右の概念を充分得らるゝならんか。(此場合、相互の異性同志の反撥或は交合||熱氣作用も考慮すべきやに思はぬでもなきも、今回は夫れを全然閑却或は不問にして、論ぜざることを茲に特記するなり。)

右を判り易く説明する爲に、水と水銀とのトリチエリー真空を以てせん。

真空氣は21%の $+H$ ||燃熱子の三倍餘即ち78%の $-H$ ||エーテル原子によりて、代表或は支配さるゝものと観ざるべからざるべし。故にトリチエリー真空内の真空氣に作用

する即ち働きかくるものは、其真空を形成する物質中の $-H$ ||エーテル原子及び其近似性の原子||熱子ならざるべからざる理なりとす。

今水と水銀を大雑把的に比較すれば、

水、 $-H$ ||エーテル原子量(水素)多分にして、 $+H$ ||燃熱子量少分なり。

水銀、 $-H$ ||エーテル原子量少分にして、 $+H$ ||燃熱子量多分なり。

水を以て、トリチエリー真空をつくるものとすれば、 $-H$ 性たる水素多分なる水の、

$-H$ ||水素は真空内の真空氣(即ち $-H$ ||エーテル原子に)に強烈なる水平運動を惹起せんとす||同性牽引性を發揮せんとす。然れども、水素のみの専斷的活動を許されずして水全體が、真空管内に上昇する結果となるものなり。

斯の場合水中の $-H$ 性たる水素のみが活動するにあらずして、空氣の窒素も、因果關係を蘊釀して、夫れを強力補助、後援するは勿論なり。水($-H$ 性たる水素が)がトリチエリーの真空をつくれれば、空氣(主として $-H$ 性たる窒素)はマグデブルグの真空球を

つくること等を推して考ふれば右の理も了解するを得んか。即ち此場合水中の水素は窒素の代理にして、空氣窒素が根本體なり。

水に比較して水銀中の H || エーテル原子はかなり少分、少量なるを以て、トリチエリ―真空管への水銀昇騰力は水より低き道理なり。酒精は夫れ等の中間なれども、少々水に近からんか。亦此章の理を布衍することによりて斯の毛細管現象の理も説明可能なるべし。

讀者は亦、維新化學に H || エーテル原子―窒素―水素―眞空氣―等の研究が甚だ必要缺ぐべからざること自然思ひ當られしならん（地球引力の場とは、眞空氣、及び空氣の存在する限界なりと云ひ替ふるを得べし。又此章を吟味してから、これまでの熱氣學を再検討すれば却て得るところ多々あらんか。）

三 電子論の錯誤・眞空氣

現代化學が酸素と炭素、

現代電子論が電子と陽核、

に執着して、最も肝心なる H || エーテル原子に氣付かざるは共に重大なる錯誤なるなり。化學が H 性たる窒素（及び水素）の重要性を知らずして H 性たる酸素を鐘愛するに反し、理學は電子論の電子に目がくれて、電子萬能に自淫、自慰するに到る、實に氣の毒千萬たる次第なり。

H || 燃熱子 || 陽核の電位の極微小なるもの即ち實際電子と、現代理學の電子 || 理想電子 || H || エーテル原子との區別を、現代理學が判然たらしむる能はざりしは、主として電氣の正體を捕捉し得ざりし罪に歸すは勿論なれども、從としては、物質中の H || エーテル原子が多少、物質性 || 熱氣性 || 燃熱子化、或は活動的性狀などを俱備して所謂電子 || 理想電子との區別容易ならざりし點も掲げざるべからざるならんか。

かゝる問題を論ずることは余の、不得手且つ不本意とするところなるを以て、篤學

の士の多少の参考に資するため、古典電子論に飽足らざりし理學者によりて唱導される「新電子論」(三枝彦雄氏著)より若干を抜萃してみん。

「——電子に磁氣能率を附與せしめた所謂自轉電子の考察に依つて訂正を受けることとなつたのである——。——金屬内の自由電子を電子瓦斯として扱ひ、電子が運動にあるとき原子と衝突を行ふことは、ローレンツの電導論と全く同様である——。——同一金屬内に於て、温度の差異による二點間の電位差を熱起電力と名づけて居る——。——金屬を白熱するとき其表面から電子が放出する現象を熱電子現象と名づけ、是をリチャードソン効果とも名付けて居る——。——真空中に於ては電子存在しないものなる故、従つて電子は金屬内部に於て電子瓦斯の壓力の爲に表面に向つて押され、 W_a の仕事の爲に金屬外に放出されるのである——。——電氣力に依つて金屬内部から電子を放出せしむることは、放電の如き現象を考察する上に於て極めて重要なものであり、更に一般電導の問題をより精細に考察する爲の材料を與へるも

のである。其爲に最近實驗的にも理論的にも多くの研究が發表されるに至つた——。——上に示した程度以上に一致する理論的結果を出す爲には更に電子の間に働く相互作用を考慮しなければならぬ。特に金屬が溶解して蒸氣になる如き、状態の變化に依る場合の磁氣透過率の變化を説明することは困難であつて、相互作用の考慮が必要であることが考へられる——。——古典電子論に依る光電効果は原子内の自由電子が光のエネルギーを吸収して光電子として放出すると考たが、波動力學に依る光電効果は金屬の原子内に於ける所謂軌動電子の運動が光の電磁氣力に依つて攪亂されて光電子として放出することを考慮してゐる——。——電子・原子、及び分子の間の衝突の問題の考察は波動力學及び新量子力學の見地から見ても極めて重大なるものである——。以上」

余の所謂偏理屈が如何に難解なものであり、偉大なる記憶力と、絶大なる想像力と異常の根氣あるに非れば、現代理學を完全に理解し得ざる點などの、ヒントを讀者に

與ふるを得ば余の本懐なるを以て、更めてこれより我原理の説明に取りかゝらん。

電燈は電流たる⁺H⁺燃熱子が、タングステン中の⁺H⁺と同性牽引⁺H⁺結合してタングス

テンの燃熱子を増加し、更に氾濫して電球内の真空氣、及電球外の真空氣や空氣の⁺H⁺

燃熱子と共に合作して燃熱子波動⁺H⁺電磁波を真空氣及び空氣中に發生して熱氣作用を惹起して、かの電燈光線となるものなり。強き電流を急激に送電して電球の破裂す

る場合あるは、電球内に余の所謂真空氣存在せる歴然たる證據なりと云ふべし。

⁺H⁺燃熱子を多量に含有する、電位差の大なる雲の二集團が接近すれば、同性牽引作用⁺H⁺電氣現象を惹起して、至極強烈なる其衝突エネルギーが

(一) 周圍の真空氣を攪亂したるものは斯の電光たる熱氣作用となり。

(二) 周圍の空氣を攪伴したるものは、斯の雷音たる熱氣作用となるものなり。

地球引力の場には真空氣と空氣の兩様存在すべきことは既に説明したるを以て了解されるならんが、真空氣の傳播力は、真空氣が空氣に比して抵抗極めて少きを以て、

迅速なれば、斯く電と雷との差を發生するに到るものなり。故に右の説を逆説に偏理屈すれば、

(一) 電光線は真空氣の音にして、

(二) 雷音は空氣の光線なり、——とコジツケるとも差支なからんか。

火燧石にて鐵片を急激に打てば、其分子は勢よく飛散して周圍の

(一) 真空氣を激動するものは火花となり。

(二) 空氣を激動するものは音となるなり。

至極強烈なる太陽エーテル光波の直行⁺H⁺直射するものは、主として真空氣を激動亂して太陽光及び直射光線となり——太陽エーテル光波の出現による、地上のエーテル原子量減少の結果は主として空氣(酸素)の自然活動となりて、晝の光り、晝間の明りとなるものなり。

マグデブルグの真空球を強烈なる力を以て神速に分離すれば、真空球内の真空氣

と、球外の

- (一) 空氣に作用して爆發音となり。
(二) 眞空氣に作用して火花となるなり。

此場合、分離力強烈ならざれば、音は發するも火花とはならざるなり。抵抗の少き眞空氣を動亂するには亦強烈なる力を要するものなり。

又、かの爆發に^H—^Hエーテル原子性たる窒素や水素が關係ある理も、早や讀者には了解可能ならんか。

余の謂ゆる眞空氣を形成する21%の^H—^H燃熱子は、所謂地球引力に該當するを思はゞ余が、地球引力 \parallel 燃熱子或は、引力は光熱するなり！と云ふ眞意も了解可能なるべし。

實に眞空氣の研究こそは、維新高等理化學の寵兒たるの時節必ず到來すべきならんやに確信する次第なり。

(此章は、第三章の電氣の正體の次ぎ位に記載すべきが當然なるやに思ふも、實はペンを走らせているうちに思ひ付きたるものにして、これを以て熱氣學を全部書き替へるが得策なるも早や根氣なきを如何にせん。仍て讀者はそのつもりで了解されんことを希望するなり。改編の機會にやり直ほす考なり。)

第十三章 最近の自然科学

田邊元氏の右著書一〇五頁より抜萃

「此等の結果を總收して機械的原子論の最後の偉大なる自然觀を構成しよう、と試みたのはヘルツ其人である。彼の力學はプランクの言つたやうに、現在の物理學といふよりも將來の物理學、或は一種の物理學的信仰告白ともいふべきものであつて、終極の單純一様なる質點の運動に由て一切の自然現象を機械的に説明する計畫を立て、

其徹底せる立脚地、其美はしき調和的の組織は人をして嘆賞禁ぜざらしむるものである。

彼はヘルムホルツの認めた運動エネルギーと潜状エネルギー、又機械的エネルギーと電磁的エネルギー、化學エネルギー、熱エネルギーとの區別を没し、在る所のものは唯可視的物質、或は不可視的物質の運動エネルギーのみ。諸種のエネルギーは唯其質點の位置・速度等に由て生ずる差別に過ぎない。其れが何れも**運動エネルギー**たる點に於ては全く同一である。自然界の現象は畢竟惰性を有する物質の運動に歸すると考へ、時間・空間・質量といふ三つの根本概念を基礎として、形式的・數學的にいとも美はしき力學體系の組織を試みたのである。

ヘルツの力學は斯學の精華ともいふべきものであるけれども、仔細に之を驗すればプランクの言ふ如く、ヘルツ自身も恐らく感じて居たと思はれるやうに種々の困難を解決したものでなくして、唯之を實驗の到達し得ざる範圍に押し遣つたとも云ふべき

ものである。彼は光・電磁氣の如き彼の所謂不可視の運動を説明することを全く試みなかつた。

而して其試は彼以後今日に至るまで何等の進歩を見ない。却て物理學の發達はヘルツの指定した方向、否一般に機械觀と異なる他の方向を取つて進んだのである。

此が現代の自然觀の特色を成す所の電磁觀である。今や凡ての自然現象を物體の運動に基く機械的過程として理解することは斷念せられ、電磁力なるものを根本的のものと見做し、凡ての現象を、それから理解しやうと試みるのである。――

右の著書、及び石原博士著「エーテルと相對性原理の話」とは、我靈質交合性原理が眞理たることを愈々確信し、亦我原理を説述する爲にも甚有益であつたので、著者に感謝すると共に、讀者の便利や參考にもなると思ふて採録する次第なり。

（此章を玩味さるゝ學者は、熱氣學が、如何に偉大なる價值あるべきものかを了解さるゝを得んか）

第十四章 雜

一 男子は陰性にして女子は陽性なり

男子及び雄性動物は^H—靈子比較的多分に有るを以つて陰性にして靜寂性あり、亦^H—靈子は後章靈魂論にて説明する如く、人體の精力の根源即エネルギーなる故に、夫れ等は精力的にて力も強大なり。

女子及び雌性動物は、卵子製造や乳などの爲に女子の血液製造機能は活潑にして、従つて血液比較的澤山にあり、血液は大部分^H—燃熱子より成るを以て、女子は陽性にして活動的なり。

^H—靈子を多分に有する雄人は^H—燃熱子を多分に有する雌人に遭遇すれば、直ちに交接、交合して性感と云ふ熱氣作用を起す性狀あり、是れ人類誕生の妙法なりとす。

現代科學及び常識等に對して悉皆逆説をなす余を、詭辯或は奇矯の言を特に弄するものとして、余の妻は擯斥又は輕蔑するを常とす。然るに昨年四月八日櫻花觀賞の歸途、瀬高驛にて中學生及び女學生等と待合室に同室せし時、中學生が靜かなるに反して、女學生の騒々しさは恰も雀の大群の如く、或は蜂の巢をつゝきたる場合の如くにして、此時ばかりは道の妻も女子の陽性なるを痛感したりき。姦しいの語源も思ひ合されて笑止なりと云ふべし。亦女子が炊事に、洗濯に、育児に、オセツカイに、井戸端會議に、蔭口に……活動的及び陽性なるは何人も首肯するところならん。

亦性慾に於ても——余の居たる船に一匹の雌猫あり、平常は船尾室にのみ蟄居して其存在を殆氣付かざる程なるに拘らず、一旦交尾期にならんか、余の前任者の言の如く、七色もの大聲を出して三百六十呎の船内を、居りもしない雄君を憧れて鳴き叫びまはる悲痛の状態は、乗組員等の神經を狂亂せしむる程にも有るを以て、余のメー

ト・エンヂニア達は、熱氣學の了解不能なるに拘らず、雌性動物が陽性にして亦能動的なることを、心から承認するぞオカシキ。

亦會社に於ける余の知己・朋友等も、卅歳頃か或は以上になりて眞性感を愉悅、實感する妻君が、羞恥的、遠慮勝ちのうちにも能動的にて、結婚當時無節制に、我まゝ勝手に振り舞つて來た彼れ男子等が今や、閨中に於て次第に壓迫されつゝある苦惱を憶ひ出して、女子が陽性にして能動的なるを承服するぞ皮肉なれ、面白けれ、立つて歩るくことをし、亦靈魂量も甚しく増大せし人類は、交尾期を亡くし、且つ陰陽性に就いての現在の如き錯覺せる觀念を招來せしならん。

水と火に就いて觀んに、水は火を消す作用あるもの故、水が積極的即ち陽性であり。火が消極的即ち陰性なり……と云はゞ如何？ 「萬事よく識つてゐるが、其實何事も判らない」と云ふ光榮ある讃辭を奉るべき現代科學や常識に、我が熱氣學を説明することの如何に困難なるかに當惑、苦心する所以なり。

【兄弟又は親子喧嘩は血で解ける（縁者は血で牽く）……は同性の結合性、牽引性を意味し、夫婦喧嘩は寐て溶ける（異性）……は異性の反撥、交合性を説明することを得る比喩なりと云ふべし。西洋では風習上男子の裸體は嚴禁されるを以て、私室などにて裸體のときに雌人が偶然入り來れば「キヤツ！」と、飛び出るか或は飛び入るかこの二の場合を演出するやに謂はるゝが、前者は異性の反撥であり、後者は交合性の發揮なり。亦反撥は交接・交合性の前提或は力なりと考ふることも得ん。】

二

黄金時代にある電氣學より更に一步を進めて、熱氣學に目覺める時代には、^H地球引力原子^{||}地球燃熱子の應用に進歩・發展し、地震・噴火等の、大危険・大不安・大不生産、等にも留意し、以て熱氣工學發達し、亦今より説述せんとする無有哲學と相俟て、地球人類の文化は愈々増進・發展するに到らん。

かゝる時代には既に、我肉體は地球燃熱子に、我靈魂はエーテル原子に還元して、其熱子群の一員として活躍するなるべし。

一.^H || 靈子を無とすれば、⁺.^H || 燃熱子は有なるべし。一.^H と⁺.^Hとの交合は無有なり。

地球は無有なり。人類も人生も亦無有なり。

無より有を生ぜずとなす科學・哲學！

有より無を生ずることを説く宗教！

無有か？ はた有無か？ に迷妄する常識！

夫れ等の一切を擲捨せんとする大狂者！

無有は夢遊に通ずるなり。嗚呼！ 實に、

無有は夢遊にして、夢遊は無有なり。

萬物凡べて靈あり。阿呆となり、無心となつて、

天然・自然を觀察せよ。感謝せよ。信念せよ。

是等の語を悟得する人士に依りてのみ、靈質交合性原理は維持、發展さるゝものなり。(一九三二・九・ニクリスマス島にて)

通俗無有哲學——無有教

一 用語

無有哲學にては身體内の^H—^H—エーテル原子—^H(陰)熱子—冷熱子を、單に靈子と云ふ。

然れども^H+^H—引力原子—+(陽)熱子—燃熱子は、熱氣學と同一用語なりとす。
陰・陽熱子は、同性は相互に牽引し、異性は反撥するか又は交合・交接して熱氣作用を惹起するものとす。

人類及び動植物の交配・受胎・繁殖・消化機能・カロリー發生・呼吸・幽靈・人魂等は熱氣作用又は其類似作用の一部なり。

文中唯單に $-H$ 窒素とあるは、エーテル原子及び窒素、 $+H$ 酸素とあるは、燃熱子及び酸素、の意なることに注意すべし。

熱氣學にて既に説述せし如く、窒素は $-H$ エーテル原子を、酸素は $+H$ 燃熱子を、主體とする陰・陽熱子の熱氣物 \parallel 化合物なり。(右に準じて $-H$ 水素。或は $+H$ 炭素と云ふ場合もあるべきことに注意を要す)。

$-H$ エーテル原子 \parallel 靈子と云ふも、亦靈子は身體内にて $-H$ エーテル原子を主體とし、 $+H$ 燃熱子の極少量を混じたる——恰も水素や窒素の如き——元素と觀することも得ん。仍て單に $-H$ 靈子とする場合あるべし。是れ無有哲學を心から研究する學者には重要なる點故牢記すべし。

勿論余は現代醫學には門外漢なるを以て——亦此の無有哲學は、現代醫學や、醫學者の無智蒙昧を拓くために、夫れらの人々に唯單にヒントを與へるためなれば——大綱論に終始する所以なり。故に具體的研究は將來又は後世の醫學や哲學に俟たざるべし。

からざるなり。書中余の謂ふところの神經は神經・髓・筋、等を綜合したるものなることも茲に特記するなり。

二 人體と呼吸

人體は $+H$ 燃熱子と、 $-H$ 靈子との熱氣物なり、換言すれば、人體は靈子と燃熱子より成るものとす。

空氣が21%の $+H$ 酸素と、78%の $-H$ 窒素より成りて中和するが如く、其空氣の呼吸によりて生命を維持する人體は、空氣の逆に78%の $+H$ 燃熱子と、21%の $-H$ 靈子とによりて組織さるべきものなりとす、何故ならば、斯くありてこそ呼吸によりて中和すべければなり。故にすべて呼吸によりて生命を維持するものは斯くの如くならざるべからざるなり。然し、後章説く如く靈魂は靈子の結合物質にして亦精力の素となるもの故、靈魂の質量の多くを、徒らに腦部に滯留する人類は、動物(同じ身體量の)

に比し叡智なる代りに精力弱き理なり。

空氣	—	H	—	H	—	H	—	H
		窒素		窒素		酸素		酸素
		78%		78%		21%		21%
人體	—	H	—	H	—	H	—	H
		靈子		靈子		燃熱子		燃熱子
		21%		21%		78%		78%

三 人體の新陳代謝

人體の新陳代謝の法に左の如く二種あり。

- (一) 飲食物攝取 (附、排泄作用)
- (二) 空氣の吸收 (附、排出作用)

生命を維持する爲には共に必要缺くべからざるものにして、生命は此二作用に依りて維持さるゝものなれ共、呼吸作用は主にして、飲食攝取作用は従たるものなり。

呼吸作用に據るものは、空中の $-H || 窒素$ や $+H || 酸素$ を吸入するが目的にして、其必要さから云へば、 $-H || 窒素$ が78%にして、 $+H || 酸素$ は21%なりとす、即ち窒素が主に

して酸素が従たるべきものなり。故に呼吸は、酸素を吸入するが唯一の目的としたる従來の醫學説は採りに定らぬ誤謬説なりとす。

四 胎兒と臍の緒

胎兒は母體より、臍の緒を以て榮養を吸収することによりて成長するものなり。此榮養は $+H || 燃熱子$ を主體とするもの即ち純潔なる血液等なり。

兒が分娩すれば産婆は直ちに、胎兒の生命の根源たりし臍の緒を切斷し、亦動物の母親は躬ら、兒の臍の緒をカミ切るものなり。

かくの如き大切なる臍の緒の代用となるものは、

- 第一 肺と皮膚
- 第二 消化器官と排泄作用

なり。

純潔なる榮養 \parallel 血液を、臍の緒を以て吸収する胎児には肺や皮膚の活動、及び、消化器官の労働も全然無用なることに思ひ到らざるべからざるなり、是れ最も肝要なる點なりとす。即ち肺や消化器官の活動は唯純潔なる榮養 \parallel 血液を製造するため及び製造したる血液を純潔ならしむる爲のものにして、肺より吸入する窒素や酸素が直接的に消化機能に作用すべき理なることにも思ひ到らざるべからざるなり。極言すれば分娩後と雖、臍の緒を以て母體より絶えず純潔なる榮養 \parallel 血液を吸収する方法を講じさへすれば、兒は呼吸や乳も必要なしに、生命を維持すること可能なる理由なり。さて、

分娩直後兒が急に太くなるは、當時兒の身體には $+$ \parallel 燃熱子即ち純潔濃度の血肉のみが多分多量なるところに、兒が空中に暴露されるや、直ちに、主として $-$ \parallel 窒素を肺や皮膚より多量に吸収する爲なり。母胎内にては $+$ \parallel 燃熱子即ち純なる血液や榮養の補給は容易なれども、 $-$ \parallel 靈子の補給は至難にして充分ならず、亦これ等の事は分娩を容易ならしめる妙作用とも一致するなり。妊娠初期に於て母胎が梅、杏、等の酸味

多きものを嗜好するを常とするは、是等のうちには $-$ \parallel エーテル原子が多分にあり、胎兒の骨格など創造するに $-$ \parallel エーテル原子 \parallel 靈子の多量が要求されるために、 $+$ \parallel エーテル原子補給が特別に行はるゝ所以なり。

分娩兒は數日間をスヤ／＼眠りて、肺や皮膚より $-$ \parallel 窒素を吸収のために浸るものなり。此場合、現學説の如く人の呼吸するは酸素を吸入するのみが主目的なりと云ふ考へを以て、此兒に酸素のみを吸入して窒素を與へざれば、兒の生命は直ちに絶たるべし。これ等の實驗は動物試験にては容易に施行可能なるべし。窒息死と云ふ語あるが、こは窒素不足死を意味するなり。亦熱氣學十二章燃焼と窒素の項を熟讀されたる人士ならば、人の呼吸に窒素が酸素よりも却て必要なるべき所以も了解されるならんか。さて、

兒は $-$ \parallel 窒素の吸収が充分なる頃に到れば、兒の體は茲に初めて成育の第一歩に進むを以て、毎日78%の $+$ \parallel 燃熱子と $-$ \parallel エーテル原子 \parallel 靈子を規律正しく要求する

なるべし。然して乳と呼吸は其目的物たるなり。

五 肺 と 胃 腸

乳は血液の粗製品にして、血液は乳の精製品なり。血液は $+H$ 燃熱子を主體とするものなれども、乳は燃熱子の外に $-H$ エーテル原子をも比較的多分に含有するものなり。故に乳より血液を製造するためには、乳の含有する夫れ等のエーテル原子を排除すればよき理なりとす。

亦植物や肉類には多分・多量に $+H$ 燃熱子を含有するものなり。煮炊 \parallel 加熱 \parallel 燃熱子製造法なる所以も熱氣學にて既に説明したり。故に食物中には燃熱子が多分・多量に存在すべきは理の當然にして、栄養 \parallel 血液製造は、食物中より $-H$ エーテル原子を排除して、 $+H$ 燃熱子のみを精製すればよき道理なることは何人も首肯するを得んか。

食物中の少分なるエーテル原子を排除して、多分なる燃熱子のみを残留して血液に精製するためには!? 其食物を最初分解する必要あり、其爲には $-H$ エーテル原子を主體とする窒素、及び、水素、等が役立つべき理なり。

「窒素は酸素と大に異なり、化合力甚鈍く、普通の高温度に於ても容易に他物質と化合することなく、又他の氣體を鑑識するに用ひらるゝ試薬に對しても何等の反應をも呈せざるなり。化學書」

實にたのもしきは——酸素に非ずして——窒素なるなり。何んとならば消化器官中の食物の分解役たる窒素が、かの化合力強き酸素の如くであるならば、右の場合全く役立たざればなり。胃液や膽汁が酸味及び苦味あるは、夫れ等は肺によつて呼吸されたる窒素の變化物にしてエーテル原子が多分にあるを以てなりと余は斷定するなり。

今年五月十三日の東日紙上に

「草や木を液化して石油に代る新燃料。——城所氏の研究した新燃料と云ふのは、

草・木などを原料として、これへ水素を作用せしめて液化する方法で、これまでの実験の結果によると、かうして出来た新燃料は、石炭を乾溜して出来る液體よりも遙に質のよい重油で、また量的にも、葉緑素の多い部分を原料とした場合には相當に得られる事が分つた。この點は石炭には液化せぬ部分が多いのに反して、木・草にはこれが殆どないといつた事も、大きな關係を持つてゐるさうである。石油・石炭はいつか盡くる時が来るが、植物は太陽の輝いてゐる限り無くなるなどと云ふ事は考へられない。従つてこれを原料とする燃料の前途は洋々たるもので、燃料不足に悩まされる我國として城所氏の研究は、大きな歡喜でなければなるまい。

鈴木庸生博士は語る——普通の石炭液化と同様で、草木なら何でも液化される、問題はどの程度まで工業的にやれるかと云ふ點であるが、これは石炭液化も同じで、將來をまつて答へらるべき事である」

と掲載されたが、心ある人なら、之れによつて觀るも、

^{-H}||水素を主體とする水が、

飲料水となつて胃腸にて消化機能を協助すべきこと、煮沸水即ち湯茶より生水が效果的なること、食事中水を多量に飲用すれば胃液が薄められて胃腸の障害を招來すと謂はるゝ俗説の正しからざること等了解するを得ん。さて、胃腸内にある食物の分解、化學作用を爲すものは、胃液及び胆汁等にして、夫れ等は肺によつて主として^{-H}||窒素を、従として^{+H}||酸素を、吸入することによりて製造さるゝものゝ如し。
 (現代の新工業たる空氣より窒素を製造する方法は、多少參考となる點あらんかと思ふも、未だ夫れを知る機を得ざるを遺憾とす。人の呼吸は空中の酸素を吸入する必要の爲とのみ謂ふ頑迷・固陋なる現代化學や醫學には肝要ならずとも、心ある學者や、將來又は後世の爲め參考に供すべく左に我臆説を記述しておかん。)

肺及び消化器官

^{-H}||靈子、ホルモンの新陳代謝(亦神經や白血球等の)。

78% — ^{-H}||窒素

通俗無有哲學—無有教

肺吸入

消化機能（食物中の $+H$ 燃熱子を分解する爲）

21% $+H$ 酸素 $+H$ 燃熱子の新陳代謝（肉・血液・赤血球等の）
消化機能（食物中の $-H$ エーテル原子を分解する爲）

胃腸の血液製造及び其吸収機能

胃腸中にて、食物が分解されて、更に精製即ち陰・陽熱子に還元されたる曉は、

$+H$ 燃熱子 血液や榮養
 $-H$ エーテル原子 神経の素及びホルモン或は靈子

等として各自吸収さるゝものゝ如し。

皮膚

皮膚吸収 78% $-H$ 窒素
 21% $+H$ 酸素

皮膚も亦肺の如く主として $-H$ 窒素（及び真空氣のエーテル原子）を吸入し、又身體内の $-H$ 靈子と $+H$ 燃熱子の調節をも計る爲の汗の、排泄作用を司るものなり。

實に肺や皮膚は、空中の78%たる $-H$ と窒素、及び21%たる $+H$ と酸素を吸入して新陳代謝・調和・消化機能、等をするやうにつくられたるものにして、其比率にして多少の變動あらば、肺・心臓を首じめ、凡べての機能障害を招來するものなり。然して $+H$ と酸素の少分なる上空より、 $-H$ や窒素の僅少なる地中或は地下の方が、より以上危険なるは衆知の事實なりとす。炭酸瓦斯は $+H$ を多分に含有するものにして、其多量に存在する場所にて窒息するは、 $-H$ たる窒素が尠きためなり。感電して即死するは、人體は78%の $+H$ 燃熱子と、21%の $-H$ 靈子とより成るものなるに、電氣は $+H$ 燃熱子にして、感電により身體内には $+H$ 燃熱子が急激に過大増量する爲なり。

かくの如く身體の僅か21%を占むるにすぎざる $-H$ 靈子の補給・補充が、生命維持に如何に必要缺くべからざるかを注意せざるべからざるなり。換言すれば身體内にて夫

れを組織する陰、陽熱子が對等に活動せざるべからざるものと觀れば、⁺H 燃熱子に 78 對 21 の小比率にある ⁻H 靈子群の大車輪活動或は孤軍奮闘は全く懸命的にして、萬一、此靈子群の新手補充が——肺や皮膚より ⁻H 窒素を吸収することが——不完全、不充分ならば、忽ちにして甚だしき危険状態に陥るべき理は、早や讀者には了解されんか。(過多なるものが、よし夫れが必要缺くべからざるものにて、とかく顧慮されずして、僅少なるものが珍重されるのは、人情の然らしむるとは雖、呼吸に於ける ⁻H 窒素の吸入の重要なことが、從來の醫學に少しも考慮せられざりしとは!?)

又、肺結核に罹れば ⁻H 窒素の吸入不充分となる爲に、消化機能や痔に障害を來し易く、逆に胃腸や痔の甚しく不良なる人は肺結核や肺病を招來し易き理なり。

從來大火傷すれば死すと謂はるゝは、其爲め皮膚より ⁻H 窒素の吸収阻害されて、身體中の靈子の補充不充分なる所以なり。

右の如き場合等に現代醫學は「身體内に毒素を發生して危険に陥る——」云々謂ふ

も、此毒素發生は、余の云ふ、身體内の ⁺H 燃熱子過多の場合と、⁻H 靈子過少の場合と、を意味することに注意すべきなり。(其他睡眠不足すれば直ちに身體内に毒素發生する……等々、何事でも毒素一點ばりて簡単に片付けんとしたる現醫學は眞の醫學や治療術の毒素たりしと云ふを得んか。)

肺より吸入する ⁻H 窒素の一部が消化器官に作用するは肝臓を経てなるやに想像されるも、⁺H 酸素は如何なる徑路を経て消化機能を協助するものなるか? 等は將來又は後世の研究に俟たざるべからざるなり。

大蒜は ⁻H エーテル原子を多分に含有するものゝ如し、故に肺病患者、用及び強精食物として有效なり。夫れを食すれば暫次にして、吐く息が甚だ臭くて嫌惡さるゝものなり。是れ胃腸に於ける消化作用中、⁻H エーテル原子或は窒素が過多となりて——ニンニクが分解されて——肺を通じて體外に排出さるゝためなり。

(右はゲップ作用にあらず、従つて食道を通じて排出されるものにあらざることに注

意せざるべからざるなりとす。

故に胃腸に於ける消化作用には、食物の滓 \parallel カスを

- (一) 肛門或は膀胱より脱出するもの
- (二) 肺より瓦斯として排出するもの

との二種あるものなり。臍を中心として、主たる -H \parallel 窒素、従たる +H \parallel 酸素は、臍の下方丹田邊より吸収され、かの不用瓦斯は胃の邊や肺の上方部より排出さるゝもの、如し、實に面白き次第なりと云ふべし。然れども夫れらの眞の研究は將來或は後世の化學・解剖學・生理學、等に俟たざるべからざるなり。

六 ホルモン・靈魂・神經

身體内の -H \parallel エーテル原子を靈子と云ふ。現代醫學に謂ふ「ホルモン」は靈子又は其近似物なり。

身體内の -H \parallel 靈子結合物質を靈魂と云ふ。靈魂とは普通一般に謂ふ精神或は意志などと同じ物なり。

神經は靈魂の分散したるものにして、身體内の78%を占むる +H \parallel 燃熱子が、燃えすぎること抑制し、亦燃熱子と交合或は反撥して熱氣作用を惹起して身體各機能を活動等なましむるものなり。

七 靈魂の種別

靈魂には左の二種あるものとす。

- (一) 根本靈魂
- (二) 遊働靈子

神經は主として此遊働靈子が分散したるものなり。遊働靈子は、遺傳又は受胎作用、胎内(母胎)榮養、母體教養(胎内教育)、分娩後は母體の榮養(乳)、幼少年時代の